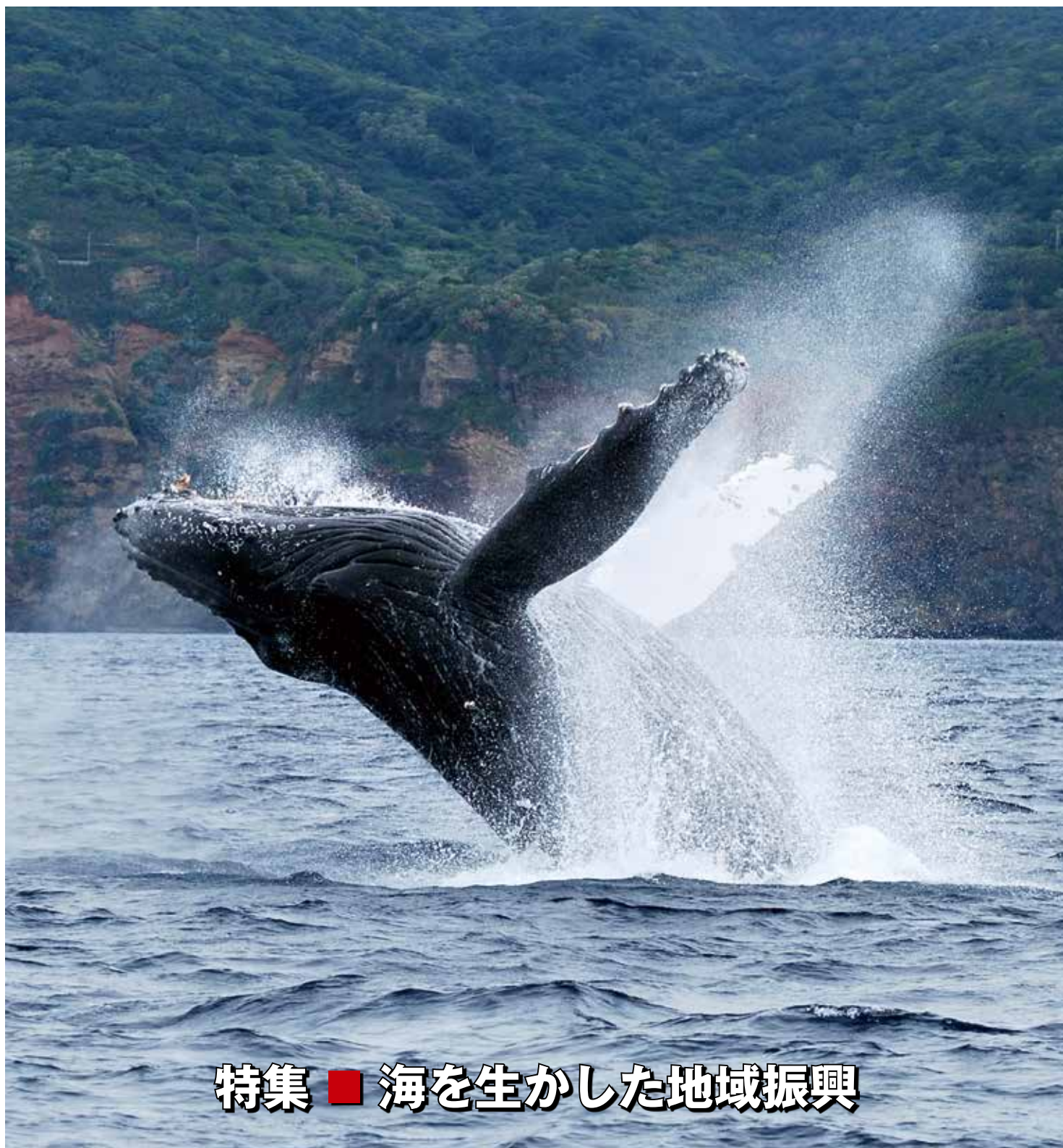


明日をひらく地域活性化のための情報誌

# 地域づくり

2015  
7

ISSN 1340-8917



**特集 ■ 海を生かした地域振興**

本誌は、宝くじの社会貢献広報事業として助成を受け作成されたものです



## 1 巻頭エッセー／地方創生は意識創生

佐竹敬久（秋田県知事）

## 特 集

## 海を生かした地域振興

|    |          |                         |                 |
|----|----------|-------------------------|-----------------|
| 4  | 基調論文     | 海を生かした地域の活性化に向けて        | 千足耕一（東京海洋大学准教授） |
| 8  | 北海道紋別市   | 多彩なイベントで冬のオホーツクを楽しむ     | 菅原裕泰            |
| 10 | 青森県五所川原市 | タラソテラピー（海洋療法）で地域を元気に！   | 白川 傑            |
| 12 | 秋田県三種町   | サンドクラフトを通して町おこし         | 熊谷幸樹            |
| 14 | 神奈川県藤沢市  | 「日本一楽しいゴミ拾い」を目指して       | 古澤純一郎           |
| 16 | 石川県羽咋市   | 「千里浜海岸」の再生に向け、プロジェクト    | 石田 慎            |
| 18 | 静岡県静岡市   | 世界に誇る美しいみなとまちづくり        | 東 恵子            |
| 20 | 兵庫県豊岡市   | 山陰海岸の魅力、ジオカヌーで伝える       | 友田克也            |
| 22 | 広島県呉市    | 古代の塩・藻塩づくりで町おこし         | 松浦宣洋            |
| 24 | 高知県高知市   | 桂浜の魅力を活かし、観光振興を推進       | 井上雄策            |
| 26 | 福岡県北九州市  | 海峡と大正ロマンのまちづくり、「門司港レトロ」 | 高橋泰雄            |
| 28 | 佐賀県鹿島市   | 「ここにしかないもの」を磨きぬく        | 愛野雅彦            |
| 30 | 沖縄県伊平屋村  | 南の島でムーンライトマラソン          | 伊礼幸雄            |
| 32 | 副基調論文    | 海洋観光の振興に向けた施策体系について     | 国土交通省総合政策局海洋政策課 |

## レギュラーレポート

- 36 トピックス 秋田県大館市 大館商工会議所  
えだまめを活用し、地域活性化プロジェクト 塚田悠祐
- 38 平成 27 年度第 1 回 土日セミナー  
「こころ豊かに生きる地域を目指す」をテーマに
- 40 移住・交流推進支援事業 京都府南丹市  
教育体験旅行を重点に、交流を推進 山田 進
- 42 地域づくり団体探訪 宮城県仙台市  
「お！宮町地域情報編集局」  
フリーペーパー発行し、地域情報を発信
- 44 書籍紹介

首長の思い  
市民とともに実践

久喜邦康（秩父市長）

## 48 センター通信

## グラビア

## 2 海を生かした地域振興

- 46 都道府県漫遊 【三重県】
- 47 手前みそですが… 【広島県竹原市】

表紙  
ホエールウォッチング

豪快にジャンプするクジラ

問い合わせ先 小笠原村産業観光課  
(049981-213114)  
(写真提供 小笠原村)

小笠原諸島は、日本のホエールウォッチング発祥の地です。  
小笠原村の父島、母島で見られるクジラは、主にザトウクジラとマッコウクジラの2種類です。ザトウクジラは、繁殖と子育てのために毎年12月から5月ごろにかけて島の近くに集まり、ブリーチングと呼ばれる豪快なジャンプをするなど動きが多彩で、見る者を飽きさせません。船上からはもちろんのこと、展望台などの陸上からも見ることが出来ます。  
マッコウクジラは、通年、小笠原諸島の近海に生息していますが、島から10〜30kmの外洋にいます。海況の安定する5月から11月ごろがウォッチングのベストシーズンです。マッコウクジラは、クジラの中でも特に潜水力に長け、時には深海に棲むダイオウイカをも食しているとか。  
小笠原村のホエールウォッチングは、クジラへの影響を考え、一定の距離を保つなどの自ルールを設けています。また、小笠原村では、世界自然遺産を維持する活動を積極的に行っています。



秋田県知事 ● 佐竹敬久

# 地方創生は意識創生

全国の都道府県・市町村においては、今まさに現在進行形で、いわゆる「増田レポート」に端を発した人口減少社会への対応策として、「地方創生」という旗印のもと「地域版総合戦略」なるものの策定に力を注いでいることであろう。

そもそも、地方の人口減少問題への対策は今に始まったものではなく、旧来から過疎地域振興対策や地域活性化策の根底に位置していたもので、それぞれの地域が様々に頭を悩ませながら進めてきたものです。

しかし、一部の市町村で人口減少に若干歯止めがかかった希少な事例はあるものの、大半は目立った成果は得られていないというのが実態です。

経済のグローバル化の進展等を背景に、かつて多くの雇用を支えてきた農業等の一次産業の衰退、高度経済成長期に雇用の受け皿となった工場群の海外移転、金融経済化・サービス産業化の進展に伴う必然的な経済機能の都市部集中、さらには高学歴社会化、個人意志の尊重という価値観の変化：等々、今の我が国の人口問題や地方の課題は、多くの要因が複合的に重なり合っている。生じてきたもので、いわば文化・文明的な要素が強く、通常の政治行政施策だけで解決への道筋が見えるものではないように感じられます。

あくまで経済原則からの概念論ですが、一例で言えば、食品分野においては、一次産品の生産から加工、販売まで一貫して取り組む、いわゆる「六次産業化」による地域の活性化という言葉が飛び交っているものの、既成の商品が溢れかえっている中に割って入り、ビジネスとして長続きする新商品を生み出すことは至難の業です。

観光振興等を通じた交流人口の拡大による地域経済の活性化と言っても、国内の観光客人口が今後大幅に減少

するとともに、ニーズも多様に変化している中では、増加している海外客にも注目されるような相当強いインパクトや特色を持つ観光資源と受入体制を持つところなど、簡単にはいかないでしょう。

本社機能の地方移転や都市部から地方への移住と言っても、自ずと限界はあるでしょうし、子育て支援の充実だけで子どもが増えるというものでもないような気がします。

もちろん、何もしないということではなく、国としての方針も定かになつた今、知恵を絞り、汗をかき、行動を起こさなければならぬのは確かです。

しかし、地方創生プロジェクトを、地方の産業規模の拡大による雇用増加、それに伴う人口増加という経済的側面からのみ追求することは、経済原則から言えば全国一斉の究極のゼロサムゲームとなり、無駄なエネルギーの消費ともなりかねません。

逆説的ですが、地方創生への取り組みの本質は、経済・雇用、あるいは人口増加策という直接的な事象や国の交付金事業にあるのではないように感じます。

むしろ、歴史・文化などを含む地域の有形・無形の資源をしっかりと見つめ直し、これから訪れる新しい時代に心豊かに人間らしく暮らせる我が地域づくりを、そこに住む人々が自らのこととして如何に為すべきかという点にこそ本質があり、それがあって初めて様々な施策・事業が活かされたものになるのではと考えます。

そのような意味合いから、地方創生の目指すところは、自らの地域の未来はそこに生まれ育った人々が主役になつて創り出すという気概を持つことにあり、まさに意識創生という言葉に置き換えてもいいのではないのでしょうか。

# 海を生かした地域振興



タラソセラピーの施設「し〜うらんど海遊館」。楽しみながら健康づくりを進める利用者

● 青森県五所川原市 (p10-11)



氷のレストランの外観。後ろに見える建物が「流水あいすらんど共和国」の活動拠点・みなとの迎賓館

● 北海道紋別市 (p 8- 9)



江の島の海岸でゴミ拾いをする「海さくら」は年2回、海中のゴミ拾いも行っている

● 神奈川県藤沢市 (p14-15)



三種町の夏の一大イベント「サンドクラフト」に向け砂像をつくる人々

● 秋田県三種町 (p12-13)



清水港では建物などのカラーに統一感を生み出す「色彩計画」で美しい港づくりを進めている

● 静岡県静岡市 (p18-19)



● 石川県羽咋市 (p 16・17)

全国で唯一、車で走れる砂浜・千里浜海岸。地元では浸食から海岸を守ろうと再生プロジェクトが進んでいる



古代の製塩遺構が出土した「県民の浜」。土器片の発見が古代の塩づくり、さらには町おこしにつながった

● 広島県呉市 (p22-23)



竹野海岸でジオカヌーを体験する観光客。同海岸は「山陰海岸ジオパーク」に含まれ、魅力的な風景が楽しめる

● 兵庫県豊岡市 (p20-21)



大正ロマンのまちづくり「門司港レトロ」事業の一環として修復された旧門司税関

● 福岡県北九州市 (p26-27)



年間 80 万人が訪れる高知を代表する観光地・桂浜。向こうに見えるのは龍王岬

● 高知県高知市 (p24-25)



「月の伴走」で美しい海岸線を走る伊平屋ムーンライトマラソンに参加したランナー

● 沖縄県伊平屋村 (p30-31)



ガタリンピックを楽しむ外国人選手。「負の遺産」とも言われた干潟が貴重な地域資源になった

● 佐賀県鹿島市 (p28-29)

# 海を生かした地域の活性化に向けて

「地域の強み」発見し、新たな付加価値つける

はじめに

民間研究機関「日本創成会議」は2014年5月に、このまま東京など都市圏への若者流出と若年女性の減少が進めば、2040年には全国896の市区町村が「消滅可能性都市」という試算を公表した。日本では都市圏に多くの人が住み、地方では人口が減少している。都会には多くの仕事がある一方、地方では就職先が見つかりにくいのが現状であろう。このような都会と地方のアンバランスが我が国に蔓延しているように思われる。

また、人間は自然の恵みによって生きているにもかかわらず、自然と調和したバランスの良い生活をしている人は少ないように見受けられる。これは、人間が身体という実体を持って生きている

にもかかわらず、身体に関してほとんど知らないことと同義であると考えられる。人間そのものが頭脳一辺倒で都会化しようとしていることは、様々なアンバランスを生み出し、自分たちの住む地域や地球を住みにくいところに変えている。

海と日本人の関係を振り返ってみると、海からの食糧供給によって、沿岸地域に多く人が住むことが可能となり、漁業を中心とした産業（漁労文化）が海辺の街を形成してきた。また、海や河川は舟艇を用いた交易（海運文化）のための場でもあり、日本各地に港街が形成され、発展してきた歴史がある。また、日本においては、海によって他国と隔絶された地勢から、他国から守るための国防・防衛の役割（海軍文化）を果たしてきた地域がある。このような海事関連の産業が盛んな地域では、その産業に従事する人々を中心とした街が形成されてきた。これらは、海を産業の場とし



東京海洋大学准教授

● 千足 耕一

てみる立場であるが、海の信仰や海の芸術、海での体験活動（海洋芸術文化）は、海沿いに住む人々における、海と人とのかわりの土台となっていると考えてよい。海を生かした地域振興を考える際、海と人とのかわりの土台の部分、言い換えれば、海という自然と人間との関係を深く考え

## 筆者プロフィール

千足 耕一 氏  
(ちあし・こういち)

東京海洋大学准教授。博士（医学）。1966年神戸市生まれ。筑波大学大学院体育研究科を修了後、筑波大学体育センター、十文字学園女子短期大学、鹿屋体育大学海洋スポーツセンター（センター長）を経て、平成20年より現職。著書に「水辺の野外教育」（杏林書院）など

ることが必要であると思われる。

様々な課題を持つ我が国にとって、「地方創生」「高齢社会対策」「少子化対策」は喫緊の課題であると言われている。本稿では「地域振興」という課題に対して、「海を生かす」ことがどれだけ貢献できるかといった可能性を考察してみたい。

## 1 海洋に関する最近の動き

海をめぐる最近の動きとしては、1994年に発効した国連海洋法条約（UNCLOS）を受け、我が国では2007年に海洋基本法が制定され、海洋を管理する時代へと変化したことがあげられる。海洋に対して日本人がこれまで以上に目を向ける必要性が法律文書で明確にされてきている。

最近では、海洋観光が注目されるようになり、海を生かした海洋観光の発展は、海洋基本法に示される海洋管理の強化につながると考えられるに至っている。

このような中、観光に関しては観光立国推進基本法が2007年に施行され、「観光」は、21世紀における日本の重要な政策の柱として明確に位置づけられた。観光立国の実現に関する施策の基本理念として、地域における創意工夫を生かした主体的な取り組みを尊重しつつ、地域の住民が誇りと愛着を持つことのできる活力に満ちた地域社会の持続可能な発展を通じて国内外からの観光旅行を促進することが、将来にわたる豊かな国民生活の実現のため特に重要であるという認識の下に施策を講ずべきこと等が定められている。

またエコツーリズム推進法が2008年に施行

され、エコツーリズムについての基本理念、政府による基本方針の策定その他のエコツーリズムを推進するために必要な事項を定めた。エコツーリズムは、自然観光資源が持続的に保護されることがその発展の基盤であり、自然観光資源が損なわれないよう、生物の多様性の確保に配慮しつつ、適切な利用の方法を定め、その方法に従って実施されることが求められるとされている。

海洋観光は、「海洋に関わる観光資源及び自然状況並びに海上交通を利用、活用する観光（海洋観光の振興に関する検討会、2014）」と定義され、海洋を活用した観光は、海水浴、海上・海中遊覧、クルーズ、離島観光等、多岐にわたると説明されている。そして、海洋観光を振興することとは、経済の活性化ならびに海洋の管理を強化することに繋がると捉えられている。

## 2 観光の変容

戦後の観光史は、観光の萌芽期（第1期）、マス・ツーリズムによる旅行の拡大期（第2期）、旅行需要の低迷期（第3期）、観光の高揚期（第4期）、バブル後の経済不況と観光事業の立て直し期（第5期）があると説明されている。近年では、従来からのマス・ツーリズムへの批判（自然環境の持続可能性が乏しい、観光地の民族文化の見世物化、大規模外部資本が利益を吸い上げて地域が潤わない、など）が加えられ、地球環境保全を意識したエコツーリズムや地方の農山漁村に滞在して体験活動を実施するグリーン・ツーリズムやブルー・ツーリズム等が提唱され、実施されるようになって

てきた。すなわち、地域の自然や文化の理解や地域との交流といった、より深いかわりを伴う観光へと移行してきた。ブルー・ツーリズムの意義は、都市と漁村の交流によって、都市住民にはレクリエーション・ニーズを充足させる機能を提供すること、漁村にとっては都市住民の来訪による経済的・社会的活性化の効果が生じることである。ブルー・ツーリズムでは、漁業体験、水辺活動・マリンスポーツはもとより、漁家・漁村施設への宿泊、漁村レストランでの食事サービスの提供、直売所などでの販売者と消費者の交流過程自体がその財の価値を決定する過程であると述べられている。

## 3 地域振興の事例に学ぶ

地方再生、地域振興は地域経済の活性化を考えることでもある。海を生かした業が地域経済活性化に果たす役割として、モノやサービスを売り、その対価として地域外からの「外貨」を獲得する手段として機能すること、訪れる人々の消費によって地域特産品などの「モノ」の地域における需要を拡大させることがあげられる。さらには、新たに地域の産業に従事する地域外からの定住人口の増加などが期待されている。

### （1）海業の振興事例

「海業」とは、観光業と融合した漁業であり、「国民の海への多様なニーズにこたえて、水産資源のみならず、海・景観・伝統・文化などの多様な地域資源をフルに活用して展開される、漁業者を中

心とした地域の人々の生産からサービスに至るまでの一連の経済活動の総称」(婁小波、2013)と述べられている。

「海業」として成功を遂げている裾南町保田漁業協同組合(千葉県)を訪問し、学生と共に講義を受け、組合長にインタビューさせていただく機会があった。その中で、「鮮魚の付加価値を高めて売る」獲れたての魚を調理する漁家レストランなどを中心とした海業で成功している「ばんや」では、第1次産業で生計を立てていた漁村の人々が第3次産業に目を向けることや、他人に頭を下げることができるなどの「意識の変革」が成功の原動力であるとお伺いした。この成功事例では、



漁家レストランなどを中心とした海業で成功している「ばんや」

事業の先細りや経営困難といった厳しい状況に立ち向かい、そこに関わる人々が意識を変革したことが示されている。

同じように、和歌山県のすさみ町では、漁協、漁業者、観光施設経営者などが出資してコーポラティブ方式の運営を行い、向上した収益が地域社会に還元される仕組みを採用している。地域資源および既存の施設等を活用し、民間主導で動き出した仕組みに、様々な行政的な補助金を活用しながら、オフショア・トーナメント、海の感謝祭、ミニボートフェスティバル、バリアフリー祭りなどのイベント開催や、集魚のためのパヤオ(浮魚礁)の設置などに取り組みとともに、カツオ、イセエビ、イノブタなどのブランド化を推進した事例である。本事例からは、共有資源である地先の海の資源利用のルールをローカルルールによって示し、地域の合意と管理に成功するとともに、利益を共有・循環させることに成功したことを学ぶことができる。

## (2) 歴史文化に触れる活動

地域の人々が生業の場として活用してきた自然の中には、人と自然との関わりを示す歴史文化資源が多く残されており、地域の歴史文化に触れる活動を通して、歴史文化に関する理解が深まることはもとより、地域の人々を指導者に積極的に取り込むことにより、新たな人間関係や繋がりが生まみ出されることが期待される。

高知県の柏島は、「島が丸ごと博物館」と捉え、島を拠点に環境保全・環境教育・調査研究など、海に関する活動や情報を発信し、それらをもとに

地域の暮らしが豊かになる支援を行っている。人と海が持続的に共存できる「里海」づくりを目指し、「体験学習・環境学習」「海洋環境調査」および「自然の保全」「海洋資源活用の振興」などを実施している。発掘した歴史文化資源を手掛かりに、人と海との関わりがどうあるべきか考える機会を提供するもので、漁村地域が1次産業と伝統的暮らしの地域資源を活かした交流としての教育旅行の受け皿として機能している事例である。

## (3) 地方再生の事例に学ぶ

海の街や集落ではなく、山間部や離島の振興事例からも、地方再生のヒントを得ることができる。山口県南東部の周防大島では、島に移住者が増えていることが示されている。イターンした若者が新たな価値を見出すジャムを作って自分も地域も利益を上げる仕組みを提示している。また、岡山県の真庭市では、製材会社がバイオマス発電を行うことによって、これまで廃棄物として捨てていた木くずを燃料として使い、加えて、発生した電力を売電することにより業績をプラスに転換した事例が示されている。

また、地方でしばしば見ることができ、空き家や耕作放棄地を活用することにより、地域の人々の「楽しさ」「誇り」「張り合い」といった副産物を得るとともに地域外からの流入人口が増加して、地域が元気になっていく事例が示されている。

いずれの事例においても、固定概念にとらわれず、発想を転換して、身近に眠る資源を生かして新たな事業を興し、お金をなるべく地域の中でま



福岡県マリンスポーツ実行委員会による教育活動の様子

わして、地域を豊かにしようとしていることが特徴である。また、先駆者の動きに学んで、様々な人々が挑戦するとともに、行政が後押しをしていることも成功事例の特徴である。

#### (4) ヨットハーバーの挑戦

ヨットハーバーはセーリングクルーザーやクルーザーなどの置き場であって、船の持ち主(オーナー)や乗組員(クルー)の人々がクラブライフを楽しむための機能が備えられている。近年、このようなヨットハーバーにおいては、船を所有する人々の減少、高齢化が進み、将来的な運営が厳しくなるのではとの危惧がある。そこで、これまでに求められている舟艇を係留する機能や船を利



海の駅として機能する河芸ヨットハーバー (三重県)

用する人々が憩う機能に加えて、人々が集まるような街づくりの視点や仕組みが必要と考え、写真展や絵画の展示といったような海洋芸術文化に関するプロモーションを行ったり、講演会やコンサート、レースやマリンスポーツイベントの開催や、レストランやショップの運営を実施したりするとともに、これまでは目を向けてこなかった、児童・生徒の海辺の体験活動の場としての機能を果たすようになってきている。

例えば、福岡県マリンスポーツ実行委員会主催の九州UMIアカデミーでは、地域における海に関わる組織や団体が繋がりがあい、主としてマリノア・ヨットハーバーと人工浜である「もち浜」を活用した、子供たちのための体験活動プログラ

ムを2011年より継続している。将来を担う子供たちに、海に関わる体験活動を通して、海の文化を伝えようとする熱意が感じられる。

また、これまでは他のハーバーを母港とする船の受け入れはそれほど盛んではなかったところから、ヨットハーバー同士がつながりあう仕組みである「海の駅」の仕組みを創設し、交流人口の拡大を図っている。この事例においても、既存の施設を活用し、これまでになかった視点に立って挑戦することが重要であることを示しているように思われる。

## 4 まとめ

海を生かした地域振興を考えるために、海洋に関する最近の動き、観光の変容、地域振興の事例について概観するとともに、その要素について考察してきた。

都市には都市の発展の仕方があり、地方には地方の発展の仕方があるということを学ぶことができると思われる。一見、経済的には弱いとみられる地方においても、発想を転換することにより、地域の強み(特徴)を発見し、そこに新たな付加価値をつけることができた多くの成功事例を認めることができる。特に地方経済は、厳しい現状にあるが、これまでの成功事例は、厳しい状況を変革のチャンスととらえる視点が必要であることを示してくれている。本誌に掲載されている、様々な事例に学び、地域の特徴を地域の強みにする動きに繋がっていききたい。

# 多彩なイベントで冬のオホーツクを楽しむ ―「建国」から30年、「流水あいすらんど共和国」―



流水あいすらんど共和国事務局 ● 菅原 裕泰

冬のオホーツクは流水だけじゃない

1月下旬から3月上旬のオホーツク沿岸と言えば誰もが流水を思い浮かべる。北寄りの風が一

下がり寒い。流水は見たいけど寒いので嫌だと諦める人もいる。しかし、ただ見ているから寒いのであって、「何か」しながらなら体は温まるし、「思いつき」も出来る。

若者中心に「共和国」立ち上げ

1985年2月、冬季は仕事が暇になる若者が中心になり地域を活性化させようと、ミニ独立国「流水あいすらんど共和国」を立ち上げた。様々なイベントを行い、自分たちが楽しむとともに、市民や観光客に喜んでいただき、また来ていただくのが狙いだった。流水に乗ることは出来ないが、間近で見えて、触れて、感じてほしい。いつも流水を見ることができるといっていいわけではないが、せっかく来てくれた人を黙って帰すのはもったいないし、それを観光の目玉商品とする観光地として失格である。

そんな思いから毎年2月に約1カ月、観光客と一緒に楽しめる様々な催しを実施している。

多様なメンバーがボランティアで参加  
夏祭りでは活動資金を調達

共和国の名前は、人を「愛す」と氷の「Ice」を掛けて命名した。建国の年はミニ独立国が全国にたくさんあったが、今では、いくつ残っているのか見当もつかない。それでも、今年で31年も活動を継続してきた。

メンバーは約30人。全員ボランティアで参加しており、職種も漁師や大工、土木関係、商店主、消防士、会社の事務員など幅広い。事業資金を稼ぐため夏の「港まつり」で焼き鳥屋台を出店し、その売り上げや紋別市からの補助金を冬季の「あいすらんど共和国」の活動に充てている。やはり資金がなければ楽しむ準備が出来ないという現実がある。

活動の拠点は当初、隙間風が吹き付けるプレハブ小屋だったが、今では立派な常設の建物、紋別市の「みなとの迎賓館」を借りて使用している。しかし、活動内容はほとんど変わらない。

リーダーは大統領で、現在は3代目。ほかにも副大統領、大蔵大臣、音響大臣など役職がある。東京のアイスランド共和国大使館にもいろいろお世話になっていて、毎年ごあいさつに伺う。こちらの呼びかけに応じて駐日大使が遊びに来たこともあったし、アイスランド本国には2度ツアーを組んで訪問し、国賓並みの歓迎も受けた。

バーベキューパーティー、巨大迷路、結婚式：氷や雪を利用し、多彩な活動

以下、「あいすらんど共和国」の主な活動内容



夏の祭りに出店した焼き鳥屋台。売り上げは冬の活動資金に充てられる

晩続くと翌朝は海一面が真っ白になる。見た目、広大な未利用の土地があるような景色になる。流水が近づくとも海からの風は冷やされてとにかく冷たく、気温は一気に



巨大迷路。縦横 50 メートルあり、中は立体交差になっている



氷のレストラン内部



パークゴルフ大会

をご紹介したい。

目玉となるイベントは、厳寒の野外で行う「氷点下まるかじりパーティー」だ。ビール箱と鋼函（こうかん）を並べ、炭で火をおこし、バーベキューをやり、紋別の海の幸や山の幸を堪能していただく。芸人呼び、終盤では音楽に合わせ花火を打ち上げる。このイベントには700人以上が参加する。

また、雪の山をブルドーザーでならし、パワーショベルで掘り、巨大な雪の迷路（縦横50㍍、高さ4㍍）を造る。この迷路に初めて入る人は出るまで30分以上かかる人もいる。中は立体交差になっているので、常識的な攻略法では出られない。タイムトライアルをやった時はルールが厳しすぎて全員失格し、やり直した。この迷路を利用して開催する「宝探し大会」には150人も来てくれる。

さらに雪上にパークゴルフコースを造り大会を行う。このほか、「みなとの迎賓館」の隣に氷で囲っ

たレストランをつくり、中で食事をしていただいている。

流水原を見渡すステージで行う「流水結婚式」も人気だ。全国から結婚式を挙げるカップルを募集し、チャペルを立て神父を招き、結婚式をする。カップルは子供を連れて再訪して、その子が独り立ちし、手伝いに来たこともある。今年は応募がなく、実施を見送ったが、また再開することも考えている。

たった2〜3日の付き合いしかなかった旅人でも未だに交流が続いている人たちが全国にたくさんいる。流水が無くても楽しむ術はいくらでもある。

### ◆◆◆ 旅人を楽しませることに専念

紋別市内や近隣の人々には申し訳ないが、ほかの地方から来てくれた観光客や旅人は特に大事にする。一緒に活動してくれるなら食事も提供する

し、宿泊場所も用意する。1日でも構わない。楽しんで思い出をつくり、どこかで宣伝して友達を紋別に送り込んで来てくれるのを期待する。

紋別を拠点にして網走や層雲峡を観光すればいい。どこも日帰り距離である。昔あったユースホステルが今は無く、旅人の情報交換場所も無くなった。徒歩で来る旅人、バイクで来る人、自転車で来る人など、冬季でも確かにいる。素通りさせない工夫は行政にまかせて、私たちは来た人を楽しませることに専念している。

### ◆◆◆ メンバーの高齢化など課題も

「あいすらんど共和国」の活動には限界も感じている。世代交代が上手くない。やはり、力仕事はしたくないのだろう。時には夜遅くまで外で作業する。寒いし汚れる。メンバーもほとんど60歳を超えた。

ただ、30年やってきて色々ノウハウを覚えた。効率のよい作業方法、楽しませ方、楽しみ方、もてなし方、魅せ方、資金調達の仕方など。しかし、現実にはアルバイトを雇って準備を手伝ってもらえない状況である。

我々のような市民ボランティアは、それがどんな活動でも少なからず地域づくりに欠かせない存在になっているのだと思う。事実、「あいすらんど共和国」の活動は市民や観光客に楽しんでいたいていることは間違いない。旅人との温かい交流は我々の大きな励みになっている。体力と気力が続く限り、この活動を続けていきたいとメンバー一同、思っている。

# タラソテラピー（海洋療法）で地域を元気に！

―「海の恵み」を健康づくりに生かす―



株式会社ウエルネスデベロップメント  
しーうらんど海遊館 支配人

・白川 傑

## 自治体初のタラソテラピーセンター

2000年11月、地方自治体が設置するものとしては日本初の本格的タラソテラピーセンター「しーうらんど海遊館」が市浦村（現五所川原市）で運営を始めました。当時は、民間施設を含めて国内で3つ目、地域密着型の健康づくり型施設としては日本初の施設でした。

タラソテラピーは、海水、海藻などの海の資源を用いて体の機能を高める自然療法で、海洋療法と訳されます。

予防医学の分野で世界的にその効果を期待され、本場ヨーロッパでは医学的根拠に基づいて施設・サービスが設計された上で、医師の処方のもとにサービスが提供されており、一部は健康保険も適用になっています。

しーうらんど海遊館では、温めた海水を入れた「元気海（げんきかい）プール」を利用し、水中運動や歩行、ジェットマッサージなど15種類の

メニューで楽しみながら効果的な運動が行えるほか、霧状にした新鮮な海水を体内に取りこむエアロゾルルーム、ミネラルたっぷりの温かい海藻ペーストでの全身パックなどでリラクゼーション、ストレス解消を目的としたサービスを提供しています。

「株式会社ウエルネスデベロップメント」は、市浦村時代から施設運営を委託され、現在は、五所川原市の指定管理者としてしーうらんど海遊館を管理運営しています。

## タラソテラピー建設の狙い 「海の恵み」生かし、健康寿命延ばす

青森県津軽地方のほぼ中央に位置する五所川原市の飛び地となる市浦地区は、津軽半島の奥に位置し、日本海に面しています。

冬は、日本海の荒波や地吹雪にさらされる厳しい面もありますが、郷土の文豪・太宰治が「気品はあるがはかない感じの湖」「ひっそりしていて、そうして、なかなかひろい」「人に捨てられた孤



元気海プール全景

独の水たまりである」と表現した十三湖がヤマトシジミの豊富な漁場として知られ、また、中世北日本屈指の大規模な港町であったことが偲ばれる国指定遺跡・十三（とき）湊遺跡など、歴史ロマンがあふれる自然豊かな地区です。

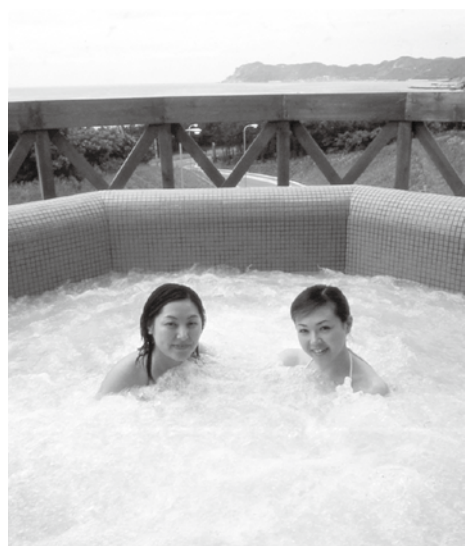
当時の市浦村は、人口約3000人で、高齢化が進む中、健康寿命をどう延ばしていくかが大きな課題となっていました。

そこで、包括ケアシステムの充実や健診体制の強化とともに、厳しい冬の間でも体を動かすことができ、地域の特性である海の恵みを活用したタラソテラピー施設を設置することにとり着きました。

全国的にタラソテラピーの認知度が低く、その存在を知る方も、海藻パックに代表されるような



プール内を移動することで、ジェット水流がふくらはぎ、ふともも、腰、背中与順番に体をほぐしてくれる



屋外のジャグジープール。日本海が一望できる

## ◆◆◆ 利用促進に向け、様々な工夫 年3万5000人が来館

エステティックなイメージがある時代に、健康づくりに海を役立てようという考えは画期的ではあったものの、タラソテラピーという言葉を初めて聞く住民からは、建設に否定的な意見も少なくありませんでした。

村では、住民に県外の既存施設でタラソテラピーを体験させるなど、理解を得るための地道な取り組みを続け、建設を実現しました。

また、当地を訪れる観光客のほとんどが夏季に集中していたことから、一年を通した体験型観光施設としての役割も期待したところです。

しーうらんど海遊館は、住民の日常生活の中にタラソテラピーを取り入れること、つまり、誰もが気軽に、安全に、安心して、タラソテラピーによる健康の維持、増進を図ることが出来る施設を目指しています。

例えば、一般的なスポーツクラブと比べて利用料金を低く設定して、年金を主な収入とする高齢者層の継続利用を可能としたこと、タラソテラピーのセラピストとして高い専門知識と技術を持つ人材を確保、育成し、利用者のニーズに合わせた効果的な運動指導やアドバイスを行うことができるようにしたこと、高齢女性から水着になることに対しての不安や抵抗の声が多いことを受け、開業前にその不安を払拭できるようなデザインの水着の紹介と試着会を実施（施設で購入可能）するなど、住民の利用を促進するための様々な取り組みを行いました。

結果として、健康志向の強い方だけではなく、レジャー志向の強い方の利用もあり、大人から子供まで幅広い年齢層の方が、県内各地から、年間

平均3万5000人（開館から平成26年度まで）が来館する施設となっています。

## ◆◆◆ 今後の課題

開業から15年の間には平成の大合併、東日本大震災など様々なことがありました。

市浦地区の人口は、今では2300人ほどに減少し、周辺市町村と同様に少子高齢化がさらに進んでいます。

しーうらんど海遊館は、市町村合併により五所川原市中心部からの利用者が増えているものの、地域人口の減少や震災後の影響で、全体としては利用者数が減少傾向にあります。利用者の多くは、元々健康意識が高い方のほか、既に生活習慣病に罹患している方、関節などの痛みを抱えた方ですが、施設本来の役割を考えれば、それらの予防のために利用される方を増やすことが必要となります。

さらに、高齢化が進む中、近年提唱されたロコモティブ・シンドローム（運動器症候群）から見た介護予防や、高齢者の生活の質向上など、施設が健康づくりを通して社会に貢献できる事柄も増えています。今後も、住民の健康意識を高めるよう市と協働しながらタラソテラピーで地域を元気にしていきたいと考えています。

また、タラソテラピーには清浄な海洋環境があることが大前提となります。豊かな海の恵みを受け続けられるように、海の環境を守ることも重要と考え、地域住民と一緒に海岸清掃活動などを継続していきます。

# サンドクラフトを通して町おこし

## ― 大小40基の「砂像」が観光客を魅了 ―



秋田県三種町商工観光交流課 主任 ● 熊谷 幸樹

温泉や海水浴場、豊富な地域資源

三種町は、秋田県の北西部に位置し、東西が約25<sup>キロ</sup>、南北が20<sup>キロ</sup>で西は日本海、南は男鹿市や大潟村と接しています。観光資源は、しょっぱい温泉の森岳温泉や秋田森岳温泉36ゴルフ場、環境省認定の「日本の快水浴場100選」の釜谷浜（かまやはま）海水浴場などがあります。

農作物としては、生産量日本一を誇る「じゅんさい」があり、旬の時期（5月～8月）には「じゅんさい」摘み採り体験を通して多くの観光客で賑わいます。これらの地域資源を活用し、「豊かな自然と大地の恵み、心ふれあう協働のまち」をテーマに、住民と行政の協働で夢と活力ある地域づくり活動を行っています。

環境に優しい彫刻・砂像

砂像とはまさに「砂」でつくる「像」です。札

幌の雪まつりの「雪像」は雪（氷）でつくりますが、それを砂で作成するものと考えれば想像できると思います。

まず皆さんに知っていただきたいことは「砂像」は環境に優しい彫刻」ということです。砂像に必要なものは「水」と「砂」だけです。型枠に入れた砂を水を入れて固めていき、圧力をかけるだけで土台は完成です。彫刻後は表面の乾燥により砂が流れ落ちるのを防ぐため、天然成分を使用した定着剤を吹きかけることで原形をとどめておくことが可能となります。「砂」という大変「もろい」素材で生まれた砂像は、多くの人に感動と驚きを与え、苦勞の末に完成した作品は一緒に作成した家族や仲間と達成感や喜びを分かち合うことができます。

夏の一大イベント・サンドクラフト  
海水浴場を会場に、活性化狙う

そんな特別な思いで作成した大小約40基の砂像を一堂に見ることができなのが、三種町で開催し



2014年のサンドクラフトのメイン砂像「風車」。プロの彫刻家・保坂俊彦氏（東京都）の作品

ている夏の一大イベント「サンドクラフト」（7月最後の土日に開催）です。サンドクラフトは、自然から生まれた砂で像を創り、やがて海に還すという環境との融和性が高いイベントです。この環境性をより一層追求し、里海の保護や芸術、文化を育んでいこうという意識を表しています。

サンドクラフトは平成9年から開催しており、今年で19回目を迎えます。このイベントは、平成8年、当町（当時は八竜町）で「日本砂丘学会」が開催された際、当時の町長と鹿児島県南さつま市（旧加世田市）の職員とで交わされた名刺交換がきっかけでした。

名刺に掲載されていた砂像の写真をみて興味を持った町長が、釜谷浜海水浴場の砂の性質を調べていただいたところ、砂像制作が可能であることがわかりました。早速、その年の冬にプロジェクト



砂像制作の様子。本番のサンドクラフト（2日間）に向け  
2～3週間にわたり砂像がつくられる



コンサートの様子。サンドクラフトでは多彩なステージ  
イベントも開かれる



「流しじゅんさい」を楽しむ観光客ら。じゅんさいは三種町  
の特産品で、生産量日本一を誇っている

ビジョンのグランドテーマとして「環境とアートの融和のまち」を掲げています。自然から生まれた砂で像をつくり、やがて海に還すという環境との融和性が高いイベントです。

今年の夏はどんな砂像がつくられ、どんなドラマが生まれるのか。来場される皆さんに楽しんでいただくため、スタッフ一同も全力を挙げる考えです。ぜひ一度、三種町を訪れ、素晴らしいサンドクラフトをご覧いただければと思っています。

トチームを南さつま市へ派遣し、砂像制作のノウハウ等を学び、平成9年に東日本で初の砂像イベントとなる「サンドクラフト」を開催しました。日本海に面した三種町の恵まれた自然環境を最大限に活かし、楽しく元気のある町づくりを進めるとともに、次世代が夢と郷土愛の持てるイベントにすることや、地域資源を活用した交流人口の拡大と特産品や町のPRによる活性化を図ることを目的に開催しました。

### 個性あふれる砂像が一堂に 様々なステージイベントも

サンドクラフトの一番の見せ場はなんとと言っても砂像です。著名なプロ彫刻家が制作するメイン砂像・特別砂像の迫力と芸術性は会場を訪れる観光客の皆さんの心を魅了します。

ほかにも仲間同士で協力して制作する一般参加

型の「中型砂像（高さ1.8メートル）」や一般の部・子供の部がある「小型砂像（高さ90センチ）」、さらには高校生による暑い夏の戦い「砂像甲子園（高さ2.1メートル）」といった大小約40基の個性あふれる作品が展示され、会場を埋め尽くします。

また、音楽やスポーツ、ご当地グルメなどを取り入れた各種ステージイベントやじゅんさいとメロンを活用した特産品のPRイベントなどが催され、2日間で約3～4万人の観光客で賑わいます。ほかにも、風力発電会社によるイベント「グロバルウインドデー」も同時開催されています。

イベント開催前には、地元建設業協会や小中学校などと一緒に砂浜のクリーンアップが複数回実施されるようになり、イベント開催のための「環境整備」から、「里海」を守るという「環境保全」というスタイルに変化しつつあります。

さらに高校生のチーム対抗「砂像甲子園」に出

場する生徒らは町内の民宿・民泊を利用するなど幅広い世代の交流も実現しています。砂像自体は本番のサンドクラフトの後、7月下旬～8月下旬の1カ月間展示されます。

### 「環境とアート」の融和めざす

このようにサンドクラフトは大自然の中での創作イベントのため、セラピー（癒し）の効果のほか、環境意識の高揚やものづくり力の養成など子供の実践教育の場としての利用が考えられます。また、砂像の制作・展示やステージ発表、スポーツ大会など多彩な活動を通じ、芸術・文化やスポーツの振興にも役立つとともに、最終的には貴重な観光資源として町内の宿泊施設の利用促進や交流人口の拡大につながると期待しています。

サンドクラフトは平成23～27年の5年間の長期

# 「日本一楽しいゴミ拾い」を目指して — 神奈川・江の島の海をきれいに —

海さくら代表 ● 古澤 純一郎

1877年、アメリカの動物学者エドワード・S・モースは、江の島で小屋を借りて臨海実験所をつくり、採集をはじめた。

なぜ江の島で？

それは、江の島を中心とする湘南海岸には、他の地域と比べて多くの生物が存在したから。古くから江の島に住んでいる方にお話を聞くと、昔は多くの生物がいて海は透明、潜ればタツノオトシ



「海さくら」のゆるキャラ「エノシゴくん」とゴミ拾いの参加者

ゴに会うことができましたとい  
います。僕は  
そんな江の島  
を想像する  
と、わくわく  
します。恋人  
と一緒に海を  
覗くと、透明  
な海の中に可  
愛い魚や珍し  
い生物が泳い

でいる。その時、横にいる恋人はどんな顔をするだろうか？ また、次世代の子供たちは透明な海に飛び込み、いったいどんな遊びを考え出すのだろうか？ そんな江の島は、たくさん笑顔で溢れていると思います。湘南・江の島の大自然に触れ、大人も子供もみんな笑顔になる、海さくらはそんな江の島を取り戻すために、2005年の立ち上げから現在まで「楽しく」活動しています。是非一度、海さくらに遊びにいらしてください。（海さくらホームページより引用）

## 江の島で毎月1回「ゴミ拾い」 楽しく真面目に環境に向き合う

私たち「海さくら」は毎月1回、神奈川県藤沢市の江の島で『目指せ！日本一楽しくゴミ拾い』を目標に活動している団体です。

2015年1月には100回目のゴミ拾いを行い、毎回の参加者は100名を超えるまでになりました。参加者は神奈川県内、都内からの方を中心に全国様々な場所からいらしています。

現在では月に1回のゴミ拾いのほか、江の島観光案内所に行けばゴミ袋・軍手・トンガがレンタルでき、手ぶらでゴミ拾いができる年中無休ゴミ拾いの『拾っちゃい隊』のシステムも作りました。最高に楽しくファンキーに、根は真面目に環境に向き合っています。

## なぜ「日本一楽しいゴミ拾い」を目指すのか 押しつけがましさを排除

都会で生きる僕達の生活の中で、自然との距離が広がっていくことを実感しています。

飲食物は、そもそも自然のものを食しているのに：空気だつてそうです。約10年間ゴミ拾いをしてますが、ゴミのほとんどは人間の出したものばかりです。街の排水溝にタバコをポイッと捨てたら、どこに行くのでしょうか？

今、海（自然）にしっかりとしたアプローチをしなければ、私達が将来に「負の遺産」を残すことになり、次世代に海をいい形で引き継いでいけない深刻な状況にあると思います。

そのアプローチは、国や県がやることなのでしょうか？僕は違うと思います。少し考えると、実はシンプルに生活と海は繋がっており、想像を少し膨らませることで、自然との距離を縮めることが出来ると思います。国や県や市などとも、うまく連携が取れればとも思います。人のせいにしがちな世の中で、僕達の世代が担う責任をしっかりと果たしたいと思います。

ただ、こんな真面目な話をすればするだけ、自然や海との距離を広げ、そしてゴミ拾いが「偽善者的」に思われるようになっていくのです。



新聞紙と拾ったタバコのフィルターで製作したカヌーの進水式



海岸で活動する筆者

## 江の島を全国のモデルケースに

神奈川の海岸には海水浴場が多数あり、日本有

海さくらも立ち上げ当初の2005年から23年、真面目一直線で活動してきました。今でも真面目で真剣ですが、アプローチの仕方を大幅に変えました。

「自然は大切」と皆さん思っていますが、「仕事などで、それどころでない！」というのが、本音ではないでしょうか？

では、この状況の中でどうするか。

海さくらの活動が楽しみになるような『日本一楽しいゴミ拾い』にすることで、押しつけがましくなく、自然に生かされているという現実を改めて考えるきっかけとなり、色々な広がりを見せて、きれいな海を次世代にいい形で引き継いでいけると思ったのです。

数の海水浴客が多いエリアです。

丹沢山系に代表される山にも恵まれ、「海・山・川・人口密集地帯」という環境上の立地は地域の魅力である一方、深刻な海岸ごみの一因となっています。

このような地域は日本全国に存在しており、僕達がこの海をきれいに出来れば、全国の自治体のモデルケースになり、未来の子供達に、いい形で、海・自然を引き継いでいけると確信しています。

また、この汚くなった海岸をきれいにする活動は、いつの日か、「やれば出来る！」「夢はかなう」という事に繋がっていけば本望です。

## 様々な工夫でゴミ拾いを楽しく 1年連続参加者にはTシャツ

また、「日本一楽しいゴミ拾い」にするために、海さくらでは、以下のような工夫も凝らしています。

○連続参加者に「ゴミ拾いの達人Tシャツ」をプレゼント

季節により海にやってくるゴミは多少違います。量も違います。「海さくら」のゴミ拾い活動に1回参加してくれるだけでも十分ですが、この1年を通して参加していただくことで、環境に対する考えがより深いものになると思いました。

そこで、1年間連続参加の方には、「ゴミ拾いの

達人Tシャツ」をプレゼントし、最長5年まで毎年プレゼントを用意しています。

○吸殻を3分間で誰が一番拾うか選手権

街の排水溝に捨てたゴミ、特にタバコの吸殻は、川を通り、海岸に漂着します。

その街と海のつながりを知り、その量を感じていただきたいと思い、3分間で吸殻を拾ったいただき、一番多く拾った人には、江の島特製のイカの塩辛をさしあげています。また海の家解体の後に出土した釘も多く海岸にあり、こちらも同様にゲーム形式で、現状を知っていただくように楽しみながら伝えております。

## きれいな海を後世に

このように「海さくら」では、日本一楽しいゴミ拾いを目指して毎月1回、江の島周辺でゴミ拾いを続けるとともに、様々な活動を展開しています。例えば環境保全の大切さを伝えるために中学校などに出向いて講演を行ったり、「海さくら」に理解のあるミュージシャンを招いて「ミュージックフェス」を開催したりしています。このほか、ゴミ拾い後にスタッフ手作りの食事を皆で食べるなどコミュニケーションの場も設けています。

今後も、楽しみながら環境保全を進める活動を展開し、江の島のきれいな海を後世に残していきたいと考えています。ぜひ一度、遊びにいらしてください。お待ちしております。

海さくらオフィシャルサイト  
<http://www.umisakura.com/>

# 「千里浜海岸」の再生に向け、プロジェクト —全国唯一、「車で走れる砂浜」を後世に—



石川県羽咋市地域整備課施設管理係

● 石田 慎

## はじめに

羽咋（はくい）市は、本州の中央部にあって、日本海に突き出ている石川県・能登半島の付け根部分に位置し、古代より能登と加賀に加え越中方面をも結ぶ交通や交流の結節点として賑わう能登の玄関口にあたります。

地域の中央に広がる平野部を囲むように、北側は眉丈山系の丘陵地、東側は石動山系と宝達山系の緑ゆたかな山々が連なり、西側は白砂青松の海岸線と遠浅水明な日本海が広がり、四季折々に細やかに変化する豊かな自然に恵まれています。

また、本市は、五重塔の妙成寺や大国主命を祀る気多大社など貴重な歴史的文化財が豊富であるとともに、日本で唯一、波打ち際を車で走れる全長8<sup>キロ</sup>の「千里浜（ちりはま）なぎさドライブウェイ」などの、個性際立つ地域資源に恵まれており、全国から年間200万人近くが訪れる能登観光の玄関口です。

## 車で走れる砂浜・千里浜海岸 浸食で毎年1<sup>メートル</sup>後退、消滅の危機

千里浜海岸は砂の粒子が非常に細かく、海水によって締まっており、全長8<sup>キロ</sup>にわたり、一般の自動車やバスのほか、バイクや自転車でも砂浜を走ることのできる世界でも珍しい海岸です。

夏には、海岸に直接車を停めて、海水浴が楽しめるほか、ジェットスキー、ビーチバレー、駅伝大会やバイクのイベントも開催されています。

その重要な地域資源である千里浜海岸ですが、近年は浸食が激しく、この20年間は海岸線が毎年1<sup>メートル</sup>ずつ後退しており、このままでは消滅してしまいう危機に直面しています。そのため、貴重な自然資源を子々孫々に守り引き継いでいくために、地域をあげて海岸保全とその利活用に取り組んできました。

## 渚の保全で国際シンポジウムを開催 千里浜再生に向け、委員会発足

石川県では、このような現状から海岸を守るため、平成17年にあらゆる角度から専門的に千里浜海岸の保全を検討する「千里浜海岸保全対策検討委員会」を設立し、保全対策を取りまとめています。羽咋市では平成19年2月20日に宝達志水町とともに「千里浜海岸保全・利活用推進協議会」を設立し、海岸保全を全国に訴えるとともに石川県や国に対し、より一層の海岸保全施策の促進を要望してきました。

また、平成19年11月17日に「なぎさ国際シンポジウム」を開催しました。シンポジウムでは、当時、

「車が走行できる世界の3海岸」として、アメリカのデイトナビーチとニュージージランドのワイタレビーチから代表者を招き、トークセッションを行ったほか、共同宣言を行い、かけがえのない



浸食で後退する千里浜海岸。1990年に約60mあった砂浜は2011年には約35mになってしまった



千里浜を走る自動車



千里浜再生への祈りを込めたライトアップ「キャンドルナイト」の模様

渚を保全し、友好を深め、海岸を後世に引き継ぐために、それぞれ取り組みを継続することを誓いました。

平成23年5月27日には、千里浜海岸の砂浜の維持・回復と砂浜保全に向けた県民意識の向上を目的として、「千里浜再生プロジェクト委員会」が発足しました。

委員会では、東京大学名誉教授の玉井信行氏をはじめ、学識経験者や地元代表のほか、国土交通省等の国の機関の代表者が集まり、千里浜の現況、現在の対策状況、今後の取り組み方針について検討しております。

## ◆◆◆ 千里浜再生プロジェクトがスタート 人工リーフやサンドバックで海外保全

千里浜再生プロジェクトには、海岸保全対策の検討を行う技術専門部会と、海岸利活用の検討を行う海岸利活用検討部会の2つの部会があり、前者はハード施策を、後者はソフト施策を検討しています。

技術専門部会では「人工リーフの設置」と「サンドバックによる砂流出防止工」と「金沢港の浚渫（しゅんせつ）土砂の海上投入」の3つの施策について、検討・実施・観察を行っています。今年3月31日現在、宝達志水町今浜沖に人工リーフが2基設置され、羽咋市南部に1基目を設置する工事に取っかかりしており、すでに設置されている2基の付近では、海岸線が平均で18㍎、最大で40㍎回復しています。

また、サンドバックについては、千里浜海岸北部に天端高の違うサンドバックを合計300㍎にわたり設置し、効果の検証を行っているところ、浚渫土砂の海上投入については、平成24年度に1・5万立方㍎、平成25年度に

2・5万立方㍎の土砂が投入されました。

## ◆◆◆ イベントを通じ、海岸保全をPR 一日も早い再生めざす

一方、海岸利活用検討部会では、羽咋市、宝達志水町と石川県の3者で「千里浜再生プロジェクト実行委員会」を設立し、イベントを通して海岸保全や活動をPRしています。

平成23年7月30日に開催した『千里浜再生プロジェクト2011キックオフイベント サンドバック「千」の願い』では地元の小学生とともにバケツリレーにより砂を運び、千里浜再生へのメッセージが書かれた袋に砂を詰め、再生祈願サンドバックを作成しました。

また、地元の千里浜町会が開催する「千里浜海岸侵食防止祈願祭」に合わせてライトアップイベントを開催しており、毎年、多くの方々に参加していただき、千里浜再生への祈りを込めてキャンドルやLEDを使ってライトアップを実施しています。

このほか、小学生対象の「千里浜なぎさふれあい教室」で、地引網漁や砂像作成の体験を通して千里浜海岸について学習してもらうほか、海岸保全活動をより身近な活動として認識していただくために、清掃イベント「千里浜ウォーク」を開催しています。

これらのイベントを通し、全国で唯一、世界でも珍しい「車で走ることのできる砂浜」と、その貴重な自然資源が失われつつある現状を、地元だけでなく、多くの人々に知ってもらい、一日も早い「千里浜再生」を目指したいと思っています。

# 世界に誇る美しいみなとまちづくり —清水港、色彩計画で賑わい取り戻す—

清水港・みなと色彩計画推進協議会アドバイザー会議座長

東海大学海洋学部環境社会学科教授

・東 恵子

## 美しい港づくり、女性グループが提言

産学官民の地域が総体となって合意形成し、協力しながら美しい港づくりを行った先駆的事例として清水港をあげることができる。

清水港は古くから三保半島を天然の防波堤として天女伝説の三保松原、富士山を借景にした日本



シンボルカラーに彩られたクレーンと富士山

三大美港の一つにあげられる静岡県国際拠点港湾である。しかし、戦後の経済成長を支えるために他の多くの港と同様、紅白の煙突や老朽化したタンク、倉庫などが建ち並び、汚く殺伐とした港となっていた。

平成2年、このように工業化し、市民が立ち寄れなくなった港湾空間に、物流、生産機能だけでなく生活機能も回復しようと、20代～60代の女性23名が「レディズ・マリン・フォーラム」を立ち上げた。このフォーラムは、「食べる」「憩う」「見る・景観」の三つの分科会を設け、1年間のワークシヨップを経て、「レディズ・マリン・フォーラムリポート」として提言をまとめた。これを受け平成3年、官民で構成する「清水港・みなと色彩計画策定委員会」が、費用がかからず実効性のある計画として、同色彩計画をまとめた。

## 色彩計画で港湾施設などを塗り替え 欠かせない企業の協力

この色彩計画は、自然景観と調和した人工景観を創出することを目的に平成4年度から実施されている。臨港地区の500軒について港湾機能や将来方向にに応じて、それぞれの地区にまとまりを持った色彩方針を立てたうえ、その地区の建築物、工作物などをこの方針に沿った色彩に塗り替える

ことにより、住む人、働く人、訪れる人々にとつて快適で活気のある、個性あるみなとづくりを行うことを基本目標にしている。

特に、この計画の実施にあたっては、港湾関連事業者の自主的な取り組みによる届け出制をとっている。当初は塗り替えに費用がかかることや企業に独自のCI（コーポレートアイデンティティ）があることから、対象企業の6割強の賛同も得られず計画の実効性が懸念された。このため、協力を得やすい色彩構成の提示、アドバイザー会議、企業の相談に応じやすい体制などの仕組みづくりを行い、案件のある企業にはアドバイザーが出向き、CG（コンピュータグラフィックス）によるシミュレーションなどを用いて、それぞれの企業の個性や独自性を活かしながら周辺環境との調和を図るように提案してきた。

その結果、港湾施設・工作物の塩害防止のために5～7年ごとの更新時期に合わせて周辺環境に調和した塗り替えが行われ、年間40件～50件の塗り替え相談を行い、これまで色彩計画に沿って900件余りの塗り替えが行われた。

こうして、人の集まる賑わい空間の「日の出地区」の対岸にあるタンク、煙突、ベルトコンベアなどの産業景観は、洗練された風景に生まれ変わっている。

## シンボルカラーで港のイメージづくり クレーンも洗練された色に

みなと色彩計画の特徴の一つはシンボルカラーの設定だ。

シンボルカラーはホワイトとアクアブルーで、



市民が集まり賑わいのある清水港



港見学を訪れた地元の小学生たち

計画策定時、市民・企業が清水港に求めるイメージとして挙げた「刷新した、真新しい」という意味合いを持つ色として採用された。

「美しいみなとづくり」のイメージをリードする役割をもたせ、施設・工作物に必ず一部に利用することを義務づけている。清水港の港湾あるいは景観として象徴的な機能をもつ施設には、港のシンボルカラーで配色計画をしている。

航空法の規定で通常は紅白であるコンテナカラーでも、清水港では日本で初めてシンボルカラーによりデザインされ、洗練された色に塗り替えられた。クレーンは「鶴」の意味をもち、現在清水港のコンテナバースの荷役に9基が活躍する。その姿は、港の活動と富士山の自然景観とが調和したまさに「富国徳」の風景を形成している。

◆◆◆  
年間880万人、賑わいある港に  
海外からの観光客が増加

一方、清水港では開港100周年を機に、日の出地区の再開発事業が行われ、民間による商業施設のほか親水緑地公園、マリーナなどとともに有形文化財の荷役機械テルファーが整備され、市民の憩いの場となっている。

このうち民間商業施設の「エスパルスドリームプラザ」は、ショッピングから寿司横町、ちびまるこちゃんランド、Jリーグエスパルス紹介コーナー、西伊豆紹介コーナー、シネマコンプレックスなど「見る・買う・食べる・遊ぶ」という機能がそろい、「レディズ・マリン・フォーラム」の提言をすべて実現することとなった。

こうして清水港は今や、みなと祭りをはじめ、マクロ祭り、大道芸、フラワーショー、シズオカ×カンヌ祭など年間を通してイベントが開催され、伊豆を結ぶ駿河湾フェリーの利用者などを含めると、年間880万人の人々が訪れる賑わいある港として成功している。

また、平成2年にクイーンエリザベスⅡの寄港を機に設立された客船誘致委員会により、飛鳥、クリスタルシンフォニー、ばしふいっくびいなど、咸臨丸などが寄港し、日本丸と海王丸の帆船2隻が同時に寄港した際には、3日間で15万人が集まった。

加えて、平成25年の富士山の世界文化遺産登録により昨今は、ダイヤモ

ンドプリンスなどの外国客船の寄港や海外からの観光客が増加している。

◆◆◆  
市民も高い評価  
「My Port意識」生まれる

平成17年の清水港港湾計画では、再開発が行われた日の出周辺地区が景観形成重点地区に定められ、また平成20年11月には静岡市景観条例が制定され、同地区は景観重点地区に指定された。

産業景観の象徴とも言える紅白を基調とした景観だった清水港は、次世代に継承するため総力で取り組んだ「美しい港づくり」により新しい風景に変貌している。市民・企業を対象に定期的に実施してきたアンケート調査によれば、港に対するイメージは、シンボルカラーであるアクアブルーの「新しい、清潔感がある、明るい」との印象が浸透し、約8割の回答者から「港が美しくなった」と評価され、誇れる景観として、日の出の再開発整備、港湾荷役活動のコンテナクレーン群があげられている。

また港湾関連企業は、職場環境の向上、緑化、ライトアップ、工場内見学の受け入れなどを積極的に進めており、港湾環境に対する社会貢献への意識の変化をみることができる。

このように、色彩イメージ効果を活用した官民一体の取り組みにより「世界に誇れる美しいみなとまちづくり」のネットワークが構築され、地域固有の美しい港の価値を引き出している。経済効果はもちろんのこと、企業や市民に「My Port意識」が生まれたことが何にも代えがたいものとなっている。

# 山陰海岸の魅力、ジオカヌーで伝える — ツアー参加者増加、活性化にも貢献 —



株式会社「北前館」ジオパークインストラクター

・友田 克也

観光と漁業が基幹産業  
山陰海岸が世界ジオパークに

豊岡市竹野町は、平成17年に周辺1市5町と合併した地域で、兵庫県の北東部、日本海に面しています。町の中央を竹野川が流れ、山から海までが繋がった南北に20<sup>キロ</sup>延びた一町一川の地域です。

竹野地域は、夏は海水浴、冬は日本海の味覚カニを目的とした観光誘客と漁業を基幹産業としています。

近年は、少子高齢化による後継者不足や、趣味の多様化・観光客の海水浴離れが進み、海水浴客数は、昭和40年代の50万人

をピークに現在はその半分近くまで減少しています。そのような状況の中、一つの転機として、竹野海岸を含む山陰海岸ジオパークが、平成21年に日本ジオパークに認定され、そして平成22年には世界ジオパークに認定されました。（平成26年に再認定）

東西120<sup>キロ</sup>のジオパーク  
大地の営みを遺産として学ぶ

ジオパークとは、大地に親しみ、大地の成り立ちを知り、人間と地球のこれからの関係を考える地球活動の遺産を資源とした大地の公園です。そして、地域資源を守り、後世に伝えるとともに、地球・地域を理解する教育や普及啓発に努め、ジオツーリズムをはじめとするジオパーク活動を通じて地域の持続的発展を図ることです。このジオパークは、ユネスコの支援により2004年（平成16年）に設立された世界ジオパークネットワーク（GGN）により、世界各国で推進されています。

ジオパークは地質に関する自然遺産を保護するだけでなく、教育や地域の活性化に活かしている点で、主に保護を目的とする世界遺産と異なります。また、「場所」だけでなく、そこで行われている「活動」（例えば教育プログラム、ガイド養成、地域振興策など）や、運営組織も重視されています。そして、4年に一度の見直しが行われる点も、世界遺産とは異なっています。

山陰海岸ジオパークは山陰海岸国立公園を中心として東は京都府京丹後市の経ヶ岬から、西は鳥取県鳥取市の青谷海岸までの東西約120<sup>キロ</sup>、南北は約30<sup>キロ</sup>の範囲です。

日本列島がユーラシア大陸から分かれ、日本海が形成される過程の中で生まれた地質・地形・気候は、人の暮らしや文化に深く結びついており、その大地の営みをひとつの遺産として学び、楽しむのが山陰海岸ジオパークです。

「たけのジオカヌー」ツアーを開始  
地域全体として取り組む

平成23年から、地域の観光事業者で構成される「たけのスタイル推進協議会」内の5事業者が中心となり、山陰海岸ジオパークを活用した海水浴に代わる新しい観光メニューとして、シーカヤックで山陰海岸ジオパークを巡る『ジオカヌー』ツアーを始めました。

利用する艇の選定については、初心者でも扱いやすく、転覆した際の復帰が容易なシットオンタイププのシーカヤックを採用し、色についても、女性客を意識してカラフルなものにしました。事業者個々ではなく協議会として、ジオカヌー



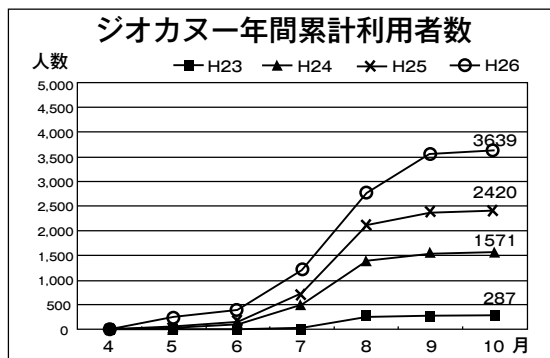
日本海に突き出た猫崎半島



ジオカヌーを楽しむ観光客。奥に見えるのは猫崎半島



ジオカヌー



事業を開始したことのメリットは次のとおりです。

① 地域全体として取り組むことで、PRの強化や「ジオカヌー」というブランドの確立を図ることが可能となりました。

② 個人事業者単位でカヌー用品一式を整備するには初期投資が高く、かなりの負担となります。地域活性化の一つとして、地域事業として、当時過疎対策計画を策定中であった豊岡市へ提案し、事業計画や展望などについての協議を重ねた結果、協議会として市から過疎事業債による支援を受ける形でカヌーを揃えることが出来ました。それにより事業者の負担を軽減する形で各事業者へ配艇することが出来ています。

また、カヌーについては、協議会から各事業所へ貸し出す形とし、そこで得た料金収入をストックすることで、市からの補助金に頼らなくてもカヌーを新規購入したり、古いカヌーを更新したり、長期的に継続できる事業体制を整えることが出来

ました。

③ 協議会としての実施基準、安全基準を定めることで、利用する観光客の皆さんに安心安全に竹野海岸を満喫してもらうことが出来、事故リスクの軽減にも繋がっています。

④ ジオカヌーを実施する際には、必ずガイドインストラクターを帯同させることにより（協議会でインストラクターを養成）、海での事故リスクを回避し、貸艇ではない、『冒険ツアー』としての付加価値を付けて観光客の皆さんにジオカヌーを提供することが出来ています。

◆ ◆ ◆ ツアー体験者が増加、半数以上は女性  
竹野海岸の魅力を満喫

平成27年現在、ジオカヌーの事業者は7事業者となりました。竹野海岸は東西に10キロほどあり、場所によって特色の違う海岸線や奇岩、風景が見られます。そして、事業者が海岸線に沿って点在

しているため、事業者ごとに特色あるコースが生まれ、何度でもジオカヌーを通して竹野海岸の魅力と地域を満喫することが出来ます。

海水浴客数が伸び悩む中、ジオカヌーツアーは、事業を開始してから毎年ツアー体験者数が増加しています。これまで夏季（7～8月）の海水浴客に頼りきりだった夏の観光シーズンを4月～10月という春・秋シーズンまで延長させることが出来つつあります。

利用者は、女性の方が半数以上です。中には、80代の高齢の方、お孫さんを連れた3世代のご家族、外国人観光客もいらっしゃいます。さらにリピーターも増加傾向にあります。これは、ただの貸艇というものではなく、インストラクターがお客さんと一緒に海に出て、海の魅力、地域の魅力を伝えられているからだと思っています。

◆ ◆ ◆ おわりに

日本海といえば、冬の荒波のイメージが強く、暗く寒いイメージを持たれている方が多いですが、春・秋の日本海、特に竹野海岸の海は青く澄んで穏やかです。（特に5～7月の海はエメラルドグリーンです）

ジオカヌーを通して、日本海の魅力、竹野地域の魅力を存分に知っていただくことで、これまでの日本海側のイメージを変え、竹野地域のファンをどんどん増やして、リピーターのお客さんの増加や移住を希望する方が増えてくれば、もっと地域全体の活性化に繋がります。過疎高齢化問題解決の糸口にもなれると思っています。

# 古代の塩・藻塩づくりで町おこし — 一片の土器の発見から地域の産業に —



藻塩の会代表  
浄土真宗本願寺派来生寺住職

・松浦 宣洋

はじめに

蒲刈町は広島県呉市の最東端に位置し、西は朝鮮通信使の寄港地として知られる下蒲刈町に接し、大小9島で構成されている瀬戸内海の島である。



修学旅行生による藻塩づくり体験

る。「日本渚百選」に選ばれた「県民の浜」や温泉があり、西泊観音からの景色は絶景である。夏は県民の海水浴場として多くの人が訪れる。温暖な気候に恵まれ、柑橘類や海の恵みである魚介類が多く採れるところである。5月には島全体に甘酸っぱいみかんの花の香りが漂う。そして、この地で発見された古代製塩遺跡をもとに様々な活動がうまれた。

## 藻塩を研究

### 土器片の発見がきっかけ

蒲刈町の歴史は古く、約2万3000年前から江戸時代までの遺跡が数十カ所ある。

1982年に私の父である松浦宣秀が海の近くの畑で一片の土器片を採取した。これは古墳時代前半（約1600年前）の製塩土器の底であった。

1983年に、この地域が「県民の浜」として開発されることになり注視していたところ、製塩土器が出たことから緊急発掘が行われた。その結果、古墳時代から中世に至る製塩遺構が出土した。

父は古代の土器による製塩法は謎であると聞いたため研究を始めた。古代に藻塩があったことは、万葉集や古今集等に369首うたわれているが、製塩方法に関する記述は古文書にもあまりはつきりしたものはない。ただ、万葉集には2〜3首、玉藻を利用したことが詠まれている。

「…朝風に玉藻かりつつ夕風に藻塩焼きつつ…」塩づくりに玉藻（玉のついでているホンダワラ系）を使ったとある。そこでホンダワラを利用して海水を濃縮していく方法の研究をした。

7年間にわたり父は一人で失敗を重ねながら研究を行った。

## 「藻塩の会」を結成 古代の塩づくりに成功

1989（平成元）年、藻塩づくり解明近の時、地域の人々による藻の採集や煮つめる作業などを手伝う「藻塩の会」が結成された。

藻塩そのものは会の結成後、2回目の実験で完成した。

こうしてできた古代の塩を藻塩というのである。塩は様々な方法でつくられたと思うが、藻を使った一つの方法として、この「藻塩焼」の方法があったのではないかとの結論に達した。

最近、製塩遺構から藻を焼いた炭などが見つかり、さらに九州や愛知県の遺跡からも同様のものが発見され、父の研究が実証された。

## 藻塩づくり体験

### 修学旅行生など年間7000人

「藻塩の会」は塩づくりの作業から得た経験を



完成した藻塩



蒲刈古代製塩遺跡復元展示館



展示館内部の様子

その理由は、古代人の知恵とロマン、藻の持つ成分であるミネラル、ヨウド等が溶け込んだまろやかな味にある。出し昆布のような味わいと言っても塩分濃度が低いことが消費者に好まれている。

現代社会に蔓延する成人病。「減塩適塩」が叫ばれる中で、身体に優しい自然塩として古代人が残してくれた藻塩が注目されているのである。

生かし、修学旅行生をはじめ多くの人々に「古代の塩づくり」の体験指導をするようになり、蒲刈町を大いにアピールすることになった。炉に土器を置き、濃縮海水をつぎたしながら完成させる方法である。

この作業は藻塩ができるまでに2時間ほどかかる。現在、春秋の小学校の修学旅行生受け入れだけで年間6000人、一般の団体や個人体験も含めると、7000人を超える体験指導を行うようになった。

### ◆◆◆ 製塩遺跡復元展示館がオープン

した時、発掘した遺跡を将来屋根で覆い、見学できるようにしたいと保存していた。当初は夢物語と一笑に付されたが、2000年に広島県知事に夢を話したところ、トントン拍子に話がまとまり、2003年5月、念願の「蒲刈古代製塩遺跡復元展示館」がオープンした。

遺跡発掘現場と出土土器を展示するとともに、タッチパネルで遺跡や古代の塩づくりなどを学ぶことのできるコーナーを完備しており、この展示館で古代の学習をして塩づくりの体験を行っている。どんな体験であっても、背景にある歴史文化などの学習をしてこそ初めて体験が生きてくるのである。

この展示館には現在、年間約1万人が訪れ、前述のように、このうち7000人余りが塩づくり

を体験している。

### ◆◆◆ 一片の土器から町の産業へ 有名ブランドも誕生

一方、こうした古代の塩づくりは町おこしにもつながっている。

ある時、美味しい塩を探していた東京の食品関連企業が、この藻塩づくりを紹介したテレビ番組を見て、その日のうちに蒲刈に来島した。藻塩を実際に味わい高く評価、その後、地元で古代の塩づくりの方法を取り入れた製塩工場を建設した。

この塩は「海人（あまびと）の藻塩」として商品化され、地域に雇用が生まれ、やがては町の産業となった。今や有名ブランドとして全国に知られるようになり、海外にまで販売されている。

# 桂浜の魅力を活かし、観光振興を推進 ―白砂青松や龍馬像、豊富な地域資源―



高知市商工観光部観光振興課 主査

● 井上 雄策

◆◆◆  
年間80万人が訪れる桂浜

桂浜は高知県高知市浦戸に位置し、龍頭岬と龍王岬の間に広がる弓状の白砂青松の景勝地です。海浜一帯は高知市の都市公園として整備されており、公園内には高知県立坂本龍馬記念館や桂浜水族館などの施設があります。

古来より月の名所として知られ、「月の名所は桂浜……」と土佐の民謡「よさこい節」にも唄われています。

桂浜の背後にある山一帯は戦国時代の武将である長宗我部氏最後の居城、浦戸城跡があります。ここは、北、東、南を海に囲まれた要害の地であり、また、紀貫之の『土佐日記』にも出てくる浦戸の港を擁し、上方との連絡、水軍の保有にも便利な場所でした。

浦戸城は石垣の一部と尾根の西方二ノ丸付近に3条の堀切を残すのみですが、今でも古城としての面影を偲ぶことができます。

現在、国民宿舎「桂浜荘」と坂本龍馬記念館の建っている周辺が、本城のあった場所となります。

また、龍頭岬の小高い丘には全国的に有名な坂本龍馬の銅像が建っており、桂浜は高知を代表する観光地として、年間約80万人を超える多くの観光



龍馬像。はるか太平洋の彼方を見つめている

◆◆◆  
客が訪れています。

龍馬の功績と志を伝える坂本龍馬像

坂本龍馬像は、高知県の青年有志が「龍馬の功績と志を後世に伝えていこう」という思いのもと、銅像建立のための募金活動を行い、当時（昭和3年）の金額にして2万5000円を集めて建立されました。昭和3年5月27日午後2時、除幕式が行われ、その姿を現した龍馬像。和服姿に懷手、ブーツ姿の龍馬は、はるか太平洋の彼方を見つめています。

像の高さは5・3メートル、台座を含めた総高は13・5メートル。銅像は高知県宿毛市出身の本山白雲製作によるものであり、銅像裏の銘板には「建設者 高知県青年」とあります。

建立から70年を超えた平成11年には像の大幅な修復がなされ、今年（平成27年）で建立から米寿（88歳）という節目を迎えた龍馬像は、建立に尽力した青年達の思いを受け継ぎ、今でも全国の龍馬ファンや観光客から愛され続けています。

◆◆◆  
自然景観と龍馬像を活かし魅力づくり

桂浜には年間を通して多くの龍馬ファンが訪れる高知県立坂本龍馬記念館があります。同記念館は平成3年11月15日に建設されました。建設のきっかけとなったのは昭和60年の坂本龍馬生誕150年です。これを記念して、龍馬の資料を展示できる館を作ろうという動きが生まれ、全国で募金が行われ建設されました。

館内には、龍馬が設立に携わった海援隊約規など、龍馬の思想が現れたものや、龍馬が兄や姉・坂本乙女に宛てた手紙など貴重な歴史資料が分かりやすく展示され、人柄や業績、考え方についても紹介されており、「龍馬への入口」とも言える記念館となっています。

また、桂浜の坂本龍馬像の横では、毎年春と秋の期間中に高さ13・5メートルの特設展望台が設置され、龍馬像と同じ目線で雄大な太平洋を眺めることのできるイベント「龍馬に大接近」が開催されます。龍馬像の横顔を間近に写真撮影などができるイベントとして定着してきています。

そして、龍馬の誕生日である11月15日には、毎年、桂浜で「龍馬まつり」が開催されます。北辰一刀流の剣士であった龍馬にちなんだ地元の剣道道場の少年剣士の試合や龍馬が愛したしゃも鍋のふるまいなどが行われます。また、坂本龍馬記念館では、記念館前のシェイクハンド龍馬像と桂浜の坂本龍馬像を人々の握手でつなぐ「レッツゴー！ハンドインハンド」なども実施され、まつりには龍馬の誕生を祝う市民や観光客が多く来場します。

平成26年6月15日には、日本中が熱気で湧いたサッカーワールドカップブラジル大会の日本対コートジボワール戦の「パブリックビューイング」桂浜」が開催されました。当日は県内外から4000人を超える来場者が、桂浜に設置された大型ビジョンとステージで試合を観戦し、龍馬のふるさと高知からブラジルへ熱い声援を届けました。

## 魅力向上に向け再整備

桂浜は昭和50年代に現在の土産品店や駐車場が並ぶサービスエリア、桂浜水族館や休憩所などが整備されましたが、それから30年余りが経過し、施設の老朽化や観光客のニーズの変化などから魅力向上のための再整備が求められています。

このため、高知市では桂浜の魅力向上に向けて、観光・宿泊関連業界関係者、有識者などで組織する「桂浜整備検討委員会」を立ち上げ、委員の意見や市民アンケート等をもとに、平成27年4月に桂浜公園整備基本構想を取りまとめました。構想では、桂浜の自然景観と歴史資源を活かし、学びや憩い、楽しみがふれる公園として再生することとし、公園内を「自然・海浜景観エリア」や「龍馬をしのぶエリア」、浦戸地域や周辺地域と連携した「コミュニティ連携エリア」など6つのゾー



高知県立坂本龍馬記念館

ンに分け、今後、整備に向けて基本計画を策定していくこととしています。

## 地域と連携し、賑わいのある桂浜へ

高知を代表する観光地であり、地域のシンボルでもある桂浜の更なる魅力向上には、市の取り組みはもちろんのこと、実際にその地域に住んでいる方々と力を合わせる官民協働の取り組みが重要であると考えています。

白砂青松と雄大な太平洋、龍馬像など桂浜の貴重な観光資源を最大限に活かし、訪れた観光客のみならず市民にとっても愛される賑わいある桂浜の実現を目指していきたいと考えています。



昨年6月のパブリックビューイングの様子。県内外から4000人を超える来場者があった

# 海峡と大正ロマンのまちづくり、「門司港レトロ」 —誕生から20年、有数の観光スポットに—



門司港レトロ倶楽部会長

● 高橋 泰雄

未来へ向けて少くない。

◆◆◆  
「門司港レトロ」誕生の背景  
「通過されるまち」に危機感

「門司港レトロ」は今年で20歳となるわけだが、その誕生の背景は更にさかのぼる。

もともと門司港地域は、明治22年に国際貿易港に指定された後、日本有数の国際航路を持つ港町として、また、九州の鉄道の起点として、さらにはその交通の便をよりどころとした銀行・商社の立ち並ぶ金融・商業都市として、明治・大正・昭和と急速に発展してきた。しかし戦後、長らく関門海峡に敷設された機雷の除去などで港としての機能が長期間損なわれたこと、土地の狭さが災いし高度成長期の開発の波に乗り遅れたこと、そして関門橋や関門トンネル、新幹線の開通や空港の誕生などで周囲の交通機能が発達したことなど、様々な要因が災いし、かつて「横浜」「神戸」と並んだ日本3大港の一つであった門司港は通過されるまちへと衰退していく。次々と企業が撤退し、

人口もピーク時からほぼ半減した。  
そんな状況に対し、市民の間ではボヤキとあきらめの言葉が日常会話となるような危機感を背景として、地元の経済界・商店街・青年会議所を中心とした若者のグループが集まって昭和60年に誕生したのが「門司まちづくり21世紀の会」という民間のまちづくり団体であった。そして彼らの問題提起と、まちづくりに対する提言に、当時の市長が応えて実現したのが「門司港レトロ」事業である。

◆◆◆  
「ふるさとづくり特別対策事業」を活用  
歴史的建造物など活用し、観光振興めざす

事業を実現させるためには人も金もタイミングも必要であるが、幸いなことに「門司港レトロ」はこの全てに恵まれた。門司港地域で解体の危機にさらされた複数の歴史的建造物の保存に頭を悩ませていた昭和62年。国（旧自治省）は、地域の特性を活かしながら、自治体が自らの企画で行う事業を財政面から支援するという「ふるさとづくり特別対策事業」を創設した。

北九州市ではこれを利用し、総事業費約300億円という今では考えられない思い切った資金を投下し、昭和63年〜平成6年にかけて門司港レトロ第1期事業「門司港レトロめぐり海峡めぐり推進事業」として、まず歴史的建造物の保存活用・港湾緑地等ハード面の整備を行った。

事業コンセプトは衰退する門司港の活性化を基本理念とし、「歴史のいきづく大正ロマンのまち」「うるおいと活気に満ちたウォーターフロント」「特色ある文化創造の拠点」という三つで、歴史的建造物、港湾資源や海峡・港町文化をうまく活用した観光振興を目的とした事業であった。事業



旧門司三井倶楽部

現在は福岡県を代表する観光地として年間200万人以上の観光客数を確保し、名前もそれなりに浸透してきたようにも思えるが、この地域の抱える課題はこれからの



JR 門司港駅。現在は平成 30 年 3 月まで大規模保存修理工事中



アンティークなどの雑貨市「グランマーケット」。例年、春と秋の 2 回開催され、多くの人々で賑わう

内容は、多岐にわたるが、代表となるのはのちに国の重要文化財となった「旧門司三井倶楽部」の移築、「旧大阪商船」「旧門司税関」の修復などである。

その他、建物以外にも電線の地中化や港沿いの整備、はね橋の建設、案内板、展望台、バイパスの建設など様々な事業が「ふるさとづくり」を支えた。

また、昭和 63 年、大正生まれの木造駅舎「門司港駅」が東京駅より先に、現存する駅舎として初めて国指定重要文化財となったことも大きな追い風となった。老朽化していた「門司港駅」は旧国鉄の英断と市民の募金により、レトロ事業策定前の昭和 60 年に修復されていた。このように行政側だけでなく、市民側も積極的に熱意を示したことも事業が成功した要因の一つであろう。その後は第 2 期事業としてホテルや駐車場など観光拠点の整備が行われ、衰退した門司港は息を吹き返していく。

最近何かと話題の「地方創生」であるが、ここはまさにその先駆的存在と言えるかもしれない。

### ◆ ◆ ◆ ソフト面担う門司港レトロ倶楽部 地元と行政、観光業者の 3 者一体

このように「門司港レトロ」は行政・民間が手を携えて誕生した。

そしてハード面を行政側が整備した後、ソフト面を民間中心で担うべく創設されたのが「門司港レトロ倶楽部」である。前述した「門司まちづくり 21 世紀の会」のような民間ボランティア団体や商店街などの地元と、行政、そして観光事業者という立場の違う 3 者が一体となり、「観光」と「まちづくり」を合わせた地域振興を目指して「門司港レトロ」誕生と同年に活動をスタートさせた。

非常に多くの一般市民が携わる全国的にも珍しい形態の団体だが、生まれ変わるまちを目の当たりにしながらの活動は、どんな立場であっても大変魅力的であったように、皆が夢中になった創生期であった。

様々なイベントを企画し、お土産ものを作り、名物グルメを掘り起こすような観光のおもてなしから、イルミネーション設置や花壇づくり、高層マンション建設への提言や文化財保存のための募金活動などの景観づくりまで、その活動は幅広く、

現在も新しい世代へ引き継がれている。

しかし、その情熱ゆえ、それぞれの立場の思惑ゆえに、意見の食い違いが生じることもしばしばで、それは現在も変わらぬ課題ではある。経済の活性化により人口減少を食い止めたい「観光」優先思考と、レトロのイメージを重視しつつ、住む環境重視の「まちづくり」を目指す市民グループ思考と、その間に立たされる行政とでは相容れない部分があるのは当然のことかもしれない。しかしながらこれはどこの観光地でも起こる必然の事態であり、前向きに相互の立場を尊重し、刺激し合って、共にまちづくりを推進していく必要がある。

### ◆ ◆ ◆ 今後の課題

古くて新しいまち「門司港レトロ」。観光客は歴史を感じるハイカラな建造物を巡り、関門海峡の美しい水際線で、潮風を感じながら大正ロマンの香りや昔の風情を感じることができ、リピーターも多い。観光地としての現状は、ある程度成功といえよう。しかしながら滞在時間の長期化や回遊性、広域連携など、まだ課題は多い。

門司港レトロ 2 短時間でまわるテーマパークのようなまち、といったイメージが定着してしまっているという現状もあり、うわべのイメージではなく「生きたまち」をどう発信していくかが、今後、来訪者や住民が増えていくためにはとても重要になる。

こうした課題は様々なまちづくり団体、事業者、行政がそれぞれに役割分担し、ゆるやかなまとまりの中で取り組んでいくことになる。さらに進化した「門司港レトロ」を目指して。

# 「いじいじ」を磨きぬく

## 「干潟の運動会・鹿島ガタリンピック」



フォーラム鹿島 事務局長  
(株)リースワン

・愛野 雅彦

### 新幹線、高速道路通らず悩む

1984年、桑原允彦・(社)鹿島青年会議所理事長(当時)は悩んでいた。原因は、新幹線および高速道路が鹿島市を通過しない、とする佐賀県総合計画である。車社会である鹿島市に、この2つが通らない。連日、まちの将来に向けて有志が意見を戦わせていた時代である。

その前年、桑原氏は、草の根活動によるまちづくりの第一人者・萩原茂裕氏の講演を聴き、「まちづくりは人づくり。自分達の足元を見つめれば、必ず他にはない素晴らしいものがある」との言葉に深い感銘を受けた。また、この年の1月には松下政経塾の1期生で全国のまちづくりの調査・研究を行っていた横尾俊彦氏に出会い、何度も鹿島市に招聘(しょうへい)してまちづくりの理念や考え方を学んでいた。しかし、いざ動き出そうとすると、思わぬ障害が立ちはだかる。鹿島JCだけでは人が足りず、また会員の住んでいる地域

や職業が偏りすぎていたのである。

そこで桑原氏は、それまでバラバラに活動していた鹿島市内の各青年団体に声をかけ、各地域や産業までも網羅した団体がつくれないか、と考えた。鹿島ガタリンピックの母体となる、後の「フォーラム鹿島」である。

### フォーラム鹿島が誕生

桑原氏とその仲間は、積極的に動いた。農漁協青年部、商工会議所青年部、各青年団や市役所の若手職員を訪ね、時には壇上で熱弁をふるい、時には1対1で語り合った。言葉による説得に限界を感じたときには酒の飲み比べを挑み、「オイが勝ったら、とにかく話を聞いてくれ」と勝負したこともあった。酔い潰れてもまちづくりへの情熱をつぶやき続ける桑原氏の姿に、協力を決意した者もいた。

また、各団体が鹿島JCの下に付くような形にならないよう、まず各団体の長で構成される「世



ガタリンピックを楽しむ選手たち

話人会」というフラットな組織を設け、そこから本格的な団体づくりを進めていった。そして1984年5月、桑原氏が初代代表世話人に就任し、「フォーラム鹿島」が設立された。

### 逆転の発想、「負の遺産」を資源に

しかし、まちづくり活動としては、やっとスタートラインに立ったに過ぎず、鹿島の未来を切り拓いていくアイデアを作り、実現させなければならなかった。フォーラム鹿島のメンバーは、萩原氏の言葉通り、鹿島の魅力を改めて発掘する事から始めた。祐徳稲荷神社、旭ヶ岡公園の桜、有明海の干潟：最終的に「干潟で何かやろう」「それなら、ガタで運動会」と盛り上がっていき、方向



韓国との交流の様子



全国かしまサミットの模様

性が定まった。この当時、干潟は鹿島市の「負の遺産」と言われ、利用価値の低い場所とされていたが、それを資源として活用する、正に逆転の発

想であった。

当初のネーミングは「ガタ・オリンピック」であったが、とある酒の席でそれらが回らなくなったメンバーが「ガタ：リンピック」と漏らした。これが、後にプロのコピーライターをも唸らせた、現在のネーミングとなる。

余談だが、鹿島市は古くから酒造りのまちであり、フォーラム鹿島発足時のメンバー集めにも酒が関わっていることを考えたとき、もし酒の神という存在が鹿島の地におわすのならば、ガタリンピックの誕生はその霊験の加護するところ、と私には思えてならない。

### ◆ ◆ ◆ 鹿島市から全国、そして世界へ

鹿島ガタリンピックも、今年で第31回を迎えた。第1回大会（1985年）では観客動員数6000人、競技出場者300人だったが、観客動員数3万5000人、出場者数2000人という規模にまで成長した。このような歴史・規模・知名度のイベントが、ほとんどボランティアスタッフの手により開催され、また予算もその大部分を有志からの協賛で賄っているというのは、全国でも他に類を見ない。

競技も毎年工夫を凝らし、ロープでガタに飛び込む「ガターザン」や自転車でガタ上の通路を疾走する「ガタチャリ」などは、出場の抽選率が毎年30倍を超える人気競技となった。また、女性のみが出場できるガタ上での押し相撲「HAKKE YOI」も、普段は隠されている女性の闘争心が爆発する競技として、観客はもちろん、出場する

女性闘士たちにも大好評の競技だ。

そしてフォーラム鹿島や鹿島ガタリンピックは、鹿島の地に幅広い交流をもたらした。全国の「かしま」と名の付く市町村に声をかけ、「かしま民間サミット」が開催された。それ以外の市町村からもまちづくりを志す同志が鹿島市を訪れ、その中には、鹿島ガタリンピックにヒントを得てイベントを開催したまちもあった。

また、鹿島市が大韓民国・高興郡と友好結縁締結したのを契機に、韓国との民間レベルの交流も促進され、第17回大会には初めて韓国の子供たちが参加した。韓国版ガタリンピックとも言える「マッドリンピック」とも、お互いのメンバーが行き来し、年々交流を深めている。そして佐賀大学の留学生などを鹿島ガタリンピックに招待し、また、鹿島市内でのホームステイによる家族レベルでの交流も行ってきた。毎年、様々な国籍の出場者たちが、グレー一色の干潟の上に華を添えてくれている。

### ◆ ◆ ◆ 受け継いでいくもの

現在、鹿島ガタリンピックは、創設当初のメンバーが前線から身を引き、若いメンバーへと代替わりを繰り返してきた。しかし、「自分自身がふるさとのために何が出来るか」という志は脈々と継承され、メンバー一人ひとりの原動力となっている。参加人数や経済効果など物理的な目標ではなく、先人たちが目指したこと、そして我々がまちや子供たちに贈りたい未来。それらを目指し、今日も、明日も、我々は、母なるガタを磨いてゆく。

# 南の島でムーンライトマラソン ―「星の声援、月の伴走」、地域も活性化―



沖縄県伊平屋村 村長・伊礼 幸雄

## ◆◆◆ 沖縄の「原風景の郷」

読者の皆さんは伊平屋村をご存じでしょうか？伊平屋村は沖縄県の最北端の有人離島です。那覇空港から車で約2時間半かけて沖縄本島北部（やんばる）今帰仁村の運天港に到着し、更にフェリーに乗り、1時間20分かかります。



海岸沿いのコースを走るランナー

人口は約1300人、面積は21・65平方キロ、周囲を美しい海岸線が取り囲み、200メートル級の山々が点在しています。沖

縄本島から離れていることもあり、現在見ることの少なくなった亜熱帯特有の海岸線の風景、珊瑚礁の石垣や古民家、古から脈々と受け継がれている伝統芸能、田園地帯が多く残っています。「原風景の郷」と呼ばれ、来島される方が都会の喧噪を忘れ、ゆったりとした時間を過ごすことができます。

◆◆◆ 村の一大イベント、月夜に走るマラソン1200人以上が参加、手厚いもてなし

風光明媚でゆっくりとした「島時間」が流れる本村で年に一度だけ、都会のような賑わいになる2日間が、村の一大イベントである「伊平屋ムーンライトマラソン」です。毎年、10月の満月に近い週末に開催されます。マラソンの名からも連想できるように、「月夜に走るマラソン」です。

伊平屋村の美しい海岸線や夕日、月、星空などの自然資源を活用したマラソン大会で、現在では参加者が村民の人口とほぼ同数の1200人以上となっています。マラソン大会では珍しく女性の

参加率が50%程度と高く、多くの女性ランナーからも支持されています。

大会は午後3時スタートのフルマラソンと同5時スタートのハーフマラソン（いずれも午後9時まで）の2本立てです。

また、フェリーを利用するため前日からの入村でも楽しめるように「前夜祭」を開催します。「前夜祭」では村民手作りのステージ演舞やアトラクションが行われるほか、村の特産品である「モズク」を練り込んだ「もずくそば」や村の地酒（泡盛）「照島（てるしま）」でつくる「照島パンチ」が振る舞われます。

さらに、大会終了後の「後夜祭」では島牛で作った「牛汁」もご賞味できます。村民の皆様と一緒に島外演者によるステージライブで盛り上がり大会を終えます。翌日は「フェリーいへやⅢ」から出港時の「紙テープ投げ」が行われ、参加者と村民が翌年の再会を約束する風景が村の風物詩となっています。

◆◆◆ 前例なく、当初は開催準備に苦慮  
島民全員で大会を盛り上げ

平成7年から地域おこしイベントとして産声を上げた「伊平屋ムーンライトマラソン」ですが、他の市町村が開催するマラソンイベントと比較しても、交通アクセスの面で大きなハンディキャップがあり、「よほど魅力的な企画でなければ来島する方が少ないのでは？」との懸念があり、誘客を図るため、「夜間に走るマラソン」を実施することになりました。

当時は、「夜間に走るマラソン」は世界中でこ



暗闇の中、走る参加者。コース沿いにはイルミネーションも



ランナーに声援を送る村民ら



表彰式の模様

の「伊平屋ムーンライトマラソン」しかありませんでした。ムーンライトマラソンの開催が決定し、道路使用許可の手続きで地元の警察署に相談したところ、「前例が無い」ことから「県警本部に判断を仰ぐように」と連絡があり、さらに県警からは「警察庁で判断してもらいたい」と言われるなど調整に苦慮したことを覚えています。

マラソン大会開催に必要な許可が本当に下りるかどうかが、開催そのものが可能であるか懸念されました。当初、安全面の指導もあり、200日間隔でスタッフを配置して運営したことを懐かしく思い出します。

また、大会開催に当たり、地元の幼稚園児は走らせる坊主の準備、小学生は期間中に提供する食料の米の植え付けから収穫、提供の準備、中学生はゼッケンなど参加者グッズの封入作業を手伝ってくれています。

### ◆◆◆ 奥尻にも「のれん分け」 南北の離島が新たな地域間交流

昨年度は節目となる20回記念大会でしたが、猛威を振るった台風19号の影響で沖縄県内全てのイ

沖縄伝統の組踊を現代風にアレンジし、披露する団体「伊平屋チムドンキッズシアター」や「伊平屋村伝統芸能保存会」によるステージ演舞、アトラクションの披露や各区・各種団体の島内全域コース上の草刈り作業など村民全てがボランティアで「伊平屋ムーンライトマラソン」に関わっています。

発足当時はボランティアスタッフも手探りの状態でしたが、現在では、沿道での三線や太鼓での応援など村民が主体的に「伊平屋ムーンライトマラソン」を盛り上げており、確実に伊平屋村の文化となっています。

ベントが中止となり、私達の「伊平屋ムーンライトマラソン」も他のイベント同様、中止の憂き目に遭いました。

大会に向け練習を重ねていたランナーの皆様は、伊平屋村を訪れるための交通機関や宿泊関係の手配にも苦慮されたのではないかと思います。私達、受け入れ側の村民やスタッフも、断腸の思いで中止を決定した次第です。

このような状況下でありましたが、うれしい報告もあります。私達の「伊平屋ムーンライトマラソン」は地域おこしの優良事例として県内外にも認知され、北海道奥尻町からの強い要望もあり、この度、のれん分けを行いました。そして平成26年6月14日に「第1回奥尻ムーンライトマラソン」が開催され、北海道の離島、奥尻町でも地域の方を巻き込んだ大会となりました。地域おこしの起爆剤としての効果はもとより、日本の北と南の離島が「ムーンライトマラソン」をキーワードにつながり、今後、新たな形の地域間交流を目指します。それにより、「ムーンライトマラソン」の名前にあぐらをかくことなく、互いに刺激し合い、高め合うことも可能かと思っています。

今年の大会は10月23、24日（23日は前夜祭）に開催する予定です。夕方から夜にかけて伊平屋村の空の下で繰り広げられるマラソン、そして、星の声援、月の伴走をぜひ皆さんも体験しに来てください。また、美しい海岸、温かい人情やおもてなしの心（伊平屋村では方言で「イハヤジューター」といいます）がたっぷり詰まった伊平屋村はもちろん、マラソン以外の観光でも楽しめること請け合いです。

# 海洋観光の振興に向けた施策体系について

## 「地域活性化と海域の適切な管理に向けて」

国土交通省総合政策局海洋政策課

### 1 はじめに

我が国は四方を海に囲まれた島国であり、今まで、海洋国家としての歴史を歩んできました。そうした私達日本国民にとって、海は、沿岸域に暮らす人にとっては生活の場であり、また内陸部に住む人にとっても、海水浴やマリンレジャーだけでなく、海の幸の享受といった、直接・間接に恩恵を受ける対象であり、古来より身近な存在であり続けてきました。

一方で、一例ですが、家族や友人、あるいは学校行事として海水浴などの海のレジャーに行く機会が、以前と比べ減っているという方も多いのではないのでしょうか。こうした実感を含め、海に囲まれているにもかかわらず、海が身近であることを実感できる機会が少なくなっているという指摘もなされているところです。

こうした背景から、平成25年4月に閣議決定された海洋基本計画では、海洋に関する国民の理解増進の観点から、国民が海を身近に感じられるよう、海洋観光などを通じて海洋に実際に触れ合う機会を充実させる旨の記載がなされており、海洋に関する国民の理解増進の実現手段として「海洋観光」が位置づけられました。

しかし、「海洋観光」の意義に加え、政策体系や課題、方向性について、これまで政府として検討、整理がなされてこなかったことから、国土交通省総合政策局海洋政策課では、平成26年1月から6月にかけて、関係する有識者による「海洋観光の振興に関する検討会」（以下「検討会」）を開催し、これまで整理されてこなかった事項について議論を重ねていただきました。検討会では、（表）に示したとおり、矢ヶ崎紀子・東洋大学国際地域学部国際観光学科准教授を座長として、観光業界やクルーズ・海運業界関係者、離島関係の有識者

の皆様に、海洋観光の魅力や政策体系、取り組むべき課題・方向性について議論いただき、同年6月にとりまとめが行われました。

本稿では、主に右記とりまとめにおける海洋観光の施策体系を紹介いたします。

## 2 海洋観光の施策体系

### （1）海洋観光の定義・魅力

「海洋観光」は、直感的にはイメージが湧く言葉ではありますが、具体的に議論を行うに当たっては、関係者の間でその認識が異なると議論が噛み合わなくなる可能性があったことから、まずはその定義を行うこととしました。その結果、検討会では、「海洋観光」を「海洋に関わる観光資源及び自然状況並びに海上交通を利用、活用する観光」と定義することとしました。これにより、「海洋観光」はマリンレジャーや海水浴といった、直接海に触れ合う活動にとどまらず、海洋に囲まれた離島での観光、さらにはクルーズ、客船などの船舶の利用そのものも対象とし、幅広く捕捉可能な定義とされたものです。

続いて、これら定義に基づく海洋観光の魅力についても整理を行い、代表的なものとして、以下の5つについて整理が行われました。

#### ・景観

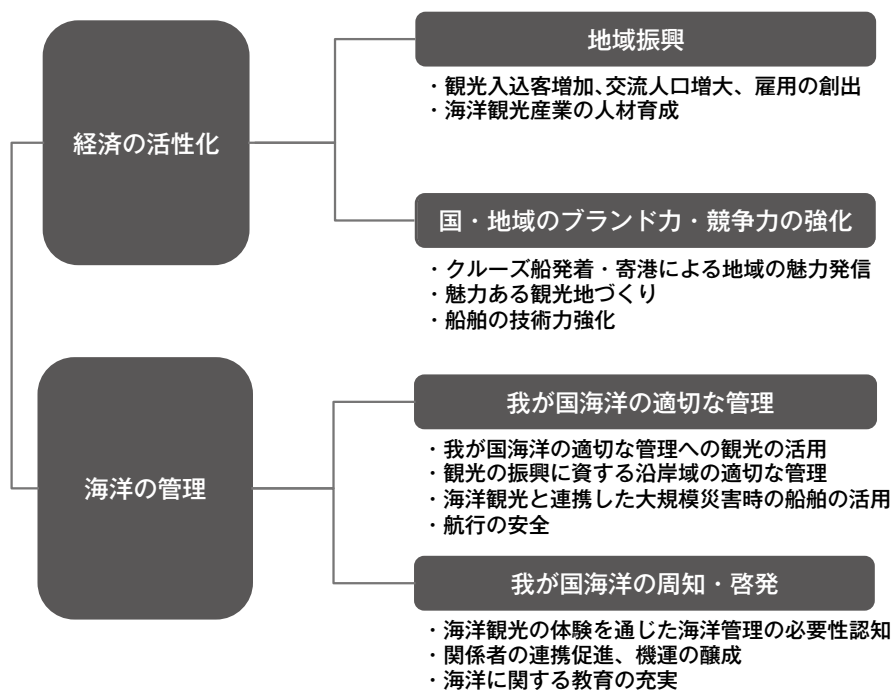
広大な我が国海洋が有するリアス式海岸や白砂青松など、多様で豊かな自然、我が国の美しい沿岸域の地形やその地形を活かした街並み、海から

(表) 海洋観光の振興に関する検討会 委員名簿

|       |                                         |
|-------|-----------------------------------------|
| 池田 良穂 | 大阪府立大学大学院 工学研究科教授                       |
| 奥 健   | (株)ダイヤモンド・ビッグ社「地球の歩き方」編集本部 本部長          |
| 興津 泰則 | (一社)日本旅行業協会 国内・訪日旅行推進部長                 |
| 清水 克子 | 近畿日本ツーリスト(株) クルーズ・マスター                  |
| 仁田 一郎 | 瀬戸内海汽船(株) 社長                            |
| 村上 寛  | 商船三井旅客(株) 取締役                           |
| 廻 洋子  | 淑徳大学 経営学部観光経営学科教授                       |
| 矢ヶ崎紀子 | 東洋大学 国際地域学部国際観光学科准教授【座長】                |
| 横山 幸代 | (株)リクルートマーケティングカンパニー 経営企画部 総研グループマネージャー |
| 渡邊 東  | (公財)日本離島センター 専務理事                       |

(敬称略・肩書は平成26年6月時点)

(図) 海洋観光の施策体系



見える景色、港の風景など、海洋の景色そのものが魅力となり得る。

・ 船への乗船体験

クルーズ船、フェリー・旅客船、遊覧船をはじめ、様々な形態はあるが、いずれも船に乗ることで得られる非日常の体験が魅力となり得る。

・ 離島の自然、歴史、文化、伝統

離島には美しい自然のほか、独自の歴史、文化、伝統が残されており、これらに触れることが魅力

となり得る。

・ 教育としての場

海が有する豊かな自然や文化などを活用した体験学習や、カヤックなどのマリンスポーツなど、海洋観光の体験を通して創出される教育の場が魅力となり得る。

・ 非日常の空間としての海

「観光」がそもそも、日常生活圏と異なる空間や体験を楽しむものであるから、海が身近でない、

すなわち非日常空間になっていることを逆手に取り、海洋観光によって非日常体験を提供できるといった魅力がある。

(2) 海洋観光の施策体系

海洋観光の定義、魅力について共通認識が図られた後に、海洋観光の施策意義、施策体系についても整理が行われました。

海洋観光は、様々な内容、活動が複数組み合わせられて行われることが多いため、関係する施策が連携して行われることが重要となっています。このような連携を進めていくに際しては、その目的や意義を関係者間で共有することが必要であるという観点から、海洋観光の意義や施策を体系的に次のように整理しました。

海洋観光の施策体系については、(図)に示すとおり、まず「経済の活性化」と「海洋の管理」の2つの大きな側面を有するとして、それぞれの側面について、2つの柱に体系化を行いました。「経済の活性化」については、海洋のみならず、一般的な観光全般においても有する大きな側面であり、交流人口拡大や雇用創出といった「地域振興」や、クルーズ船寄港による地域の魅力発信や魅力ある観光地づくりといった「国・地域のブランド力・競争力の強化」といった施策の柱を有しています。特に、クルーズ船については、世界的に乗客数が増加傾向にあることから、今後、クルーズ振興の施策が適切になされることにより、寄港地における交流人口の増加につながり、地域振興

に大きく寄与することが期待されます。

もう一つの側面である「海洋の管理」は、例えば国境離島への観光を促進することによって、「我が国海洋の適切な管理」を進めると同時に、広大な面積を有する「我が国の領海・排他的経済水域（EEZ）」について、国民に理解を深めてもらうといった施策の柱を有しています。「海洋の管理」の側面は、海洋観光ならではの特徴的な視点と言えます。

### (3) 海洋観光の課題と今後の取り組みの方向性

一方で、こうした施策体系と個別の海洋観光のメニューを比較した場合、例えば離島観光はその場所によって、ウェイトの大小はあれ、「経済の活性化」と「海洋の管理」の両方の側面を持ち合わせているように、複数の施策にまたがる場合が出てきます。こういった事情を踏まえて、海洋観光の課題と方向性を検討するに当たっては、大きく以下の7項目に分類して整理が行われました。なお、以下の課題、方向性は、国、自治体のみならず、民間事業者やひいては国民一人一人が取り組むべき方向性としてまとめられているものです。

#### ① 海洋観光の魅力の発掘・磨き上げ

「海は夏だけ」というイメージが強く、船旅が身近なものとして定着しておらず、海が身近なものではなくなったとの指摘がなされているところです。また、クルーズについては、実際には富裕

層の利用が多く、すべての顧客をターゲットとした一律的アプローチには限界があることも考慮する必要があるとの指摘もなされました。さらに、海側だけでなく、陸側からの観光資源の磨き上げが必要という課題等もあることから、通年観光が可能な海の魅力の発掘・磨き上げや、手頃なクルーズメニューの開発などが必要という方向性が挙げられています。

#### ② 魅力の情報発信手法

海が心理的に身近ではないという課題に加え、海そのものの、船そのものについての魅力、海洋観光自体に対する情報発信が十分ではないといった議論がされました。この問題意識に対し、利用者目線での情報発信が必要であり、また、船舶の安全に対する関心も高まっていることから、海洋の安全性確保や危機管理体制についても積極的にPRを行う必要があるという方向性が挙げられています。

#### ③ 産業創出・振興

我が国クルーズ産業のさらなる拡大を図る必要がある上、遊覧船・イベント船等のクルーズ以外の旅客船事業の振興、船酔いしにくい船舶の開発など、旅行者が快適に船旅を楽しめるような技術開発も必要といった方向性が挙げられています。

#### ④ 離島振興

離島までのアクセス改善、航路維持・活性化が

離島振興においては重要であり、離島内の交通手段の確保、観光資源の発掘・磨き上げ、情報発信や離島に行くための動機付けの強化も必要とされています。さらに、離島が持つ独自文化の継承を行う役割や、我が国領海及び排他的経済水域（EEZ）を根拠づける拠点として、国土保全の観点からの重要性について、広く周知することが必要といった方向性が挙げられています。

#### ⑤ 我が国海洋の周知啓発

全世代で海や船に親しむ経験が少なくなっていることや、若者が海洋に関する教育を十分に受けていない等、海離れの加速が進んでいるという課題を踏まえ、海が果たしてきた役割について、多文化との共生や人の往来、物資の輸送といった様々な観点から再認識を行うことが必要であるといった方向性が挙げられています。

#### ⑥ 海洋観光に係る人材の育成

海洋教育に関する教育人材が不足しているほか、家庭内での海洋教育が不足している面について改善を図る必要があり、また、海洋観光をコーディネートし、情報発信ができる人材の育成・確保が必要といった方向性が挙げられています。

#### ⑦ 関係者の連携

政府・自治体の関係者間での分野横断的な取り組みに加え、民間事業者等においても内陸の観光関係者との連携を図ることが必要であり、さらに、

行政と民間事業者間の連携や、船と鉄道、バス等の交通モード間の連携強化も必要であるといった方向性が挙げられています。

### 3 その後の取り組み状況

以上が検討会におけるとりまとめの概要ですが、引き続き、国土交通省においても、海洋観光に係る各局（主として総合政策局、海事局、港湾局）がとりまとめの内容に沿って施策を進めています。さらに、とりまとめの方向性を広く理解していただきたいとの考えから、本年2月に海洋政策課が主催し、「海洋観光に関するシンポジウム2015」を開催しました。

#### （一）海洋観光に関するシンポジウム

海洋観光の「経済の活性化」の側面に関しては、一般の観光全般においても念頭に置かれているものであり、クルーズの例に見られるように、海洋観光においてもイメージが容易かつ既に実践されている例も多いですが、もう一つの側面である「海洋の管理」については、つかみどころのないテーマであり、かつ目指す方向性も明確でない部分がある状況です。この点を踏まえて、海洋政策課では「海洋観光に関するシンポジウム2015」を開催し、特に海洋の管理の重要性及びその方向性について、基調講演とパネルディスカッションの中で議論を行いました。

基調講演では、南鳥島、沖ノ鳥島を管轄する東

京都小笠原村の樋口博・企画政策室長に、「小笠原諸島における海洋観光の可能性」について講演いただきました。続くパネルディスカッションでは、検討会の座長であった矢ヶ崎紀子・東洋大学准教授をコーディネーターに、離島観光の観点から長崎県小値賀町の高砂樹史・（株）おぢか観光まちづくり公社代表取締役、海外の海洋観光の視点からカナダ・プリンスエドワード島州の高橋由香・州政府観光局日本代表、海洋教育・人材育成の観点から千足耕一・東京海洋大学准教授に、基調講演を行った樋口氏を加えた4名によるパネルディスカッションを行いました。

詳細については下記に記載した国土交通省ホームページにも掲載していますが、非常に難しいテーマでしたが、各パネリストによる活発な議論が行われました。矢ヶ崎准教授からはとりまとめとして、「海と人をつなぐ者としては、介在者が重要である。海洋観光はその手段として、今後とも知恵を絞っていく必要がある。」とのコメントをいただいています。

#### （二）今後の取り組みについて

「海洋の管理」に関する側面は、地道な啓発、特に次世代を担う若い世代への周知が必要ではないかとの問題意識から、今年度は学生を対象としたワークショップ等を開催して、「海洋観光」の周知啓発等に努めていきたいと考えています。

### 4 やり方

「観光」の語源は、中国の易经であり、その意味は「国の光を観る」とされていますが、「観光」そのものはあくまで施策実現のための手段であり、「海洋観光」においては、「地域振興」と「海洋の管理」が大きな目的となっています。しかしながら、「地域振興」は他の観光と同じく、一朝一夕には実現しないものであり、「海洋の管理」に関しては、観念的であることから、どのように考え方を広めていくのか、私達自身も取り組みを始めたばかりというのが実情です。こうした機会を踏まえ、皆様のご意見を伺いながら、「海洋観光」の促進を図っていききたいと考えています。

#### （参考）

○海洋観光の振興に関する検討会

[http://www.mlit.go.jp/sogoseisaku/ocean\\_policy/sosei\\_ocean\\_tk\\_000018.html](http://www.mlit.go.jp/sogoseisaku/ocean_policy/sosei_ocean_tk_000018.html)

○海洋観光の振興に向けての最終とりまとめ  
<http://www.mlit.go.jp/common/001045580.pdf>

○「海洋観光に関するシンポジウム2015」  
～地域活性化と海域の適切な管理に向けて～  
[http://www.mlit.go.jp/sogoseisaku/ocean\\_policy/sosei\\_ocean\\_tk\\_000022.html](http://www.mlit.go.jp/sogoseisaku/ocean_policy/sosei_ocean_tk_000022.html)

# えだまめを活用し、地域活性化プロジェクト ～秋田・大館、農商工連携で6次産業化めざす～



大館商工会議所  
中小企業相談所工業振興課 主任

● 塚田 悠紘

ト参加者に協力をお願いして写真を  
サイト上で公開している。  
これにより、えだまめに興味があ  
った多くの人々の関心を惹くこと  
が出来た。また地域住民も一緒に参  
加している雰囲気を出すことに  
成功し、短期間で話題づくりや認知  
度を向上させることにつながってい  
る。

Facebook <https://www.facebook.com/edamame.odate>

Twitter <https://twitter.com/OdateEdamame>

YouTube <https://www.youtube.com/watch?v=2chyER2N4gM>

## (2) えだまめ加工・特産品の開発

市内の菓子店がスイーツづくり

一方、大館商工会議所では（公財）あきた企業活性化センターの助成制度を利用し、商品開発の支援などを進めている。

具体的にはJAあきた北が製造した加工原料（むき身やペースト）を活用して、えだまめの菓子や調味料の商品開発を支援しているほか、新たに乾燥むき身やパウダーなどの加工原料のバリエーションを増やし、製造業者の特産品開発に対する可能性を広げている。

また、農商工連携や6次産業化に

## 「えだまめのまち大館」

秋田県は「JAグループ秋田と「えだまめ出荷量日本一」を目指して、生産体制や品質管理などを強化している。大館市でも地元産えだまめの産地拡大を目指し、JAあきた北が平成26年4月から県内最大規模の農

産物流加工センターを稼働させた。

これを受けて大館商工会議所では、JAあきた北・秋田県・大館市とともに「大館市えだまめ産地育成研究会」を設置し、大館産えだまめを活用した地域活性化プロジェクトを開始させた。

プロジェクトでは「えだまめのま



えだまめを活用した地域活性化プロジェクトのポスターを手にする女性

## 交流サイトを活用

インターネットの交流サイト

「ち大館」というキャッチコピーを掲げ、①地域内における認知度の向上、②えだまめ加工・特産品の開発、③地域とえだまめの関係づくりの3つを柱に取り組みを進めている。

## (1) 地域内における認知度の向上

交流サイトを活用  
インターネットの交流サイト（フェイスブック、ツイッター、ユーチューブ）を活用して、大館産えだまめを知ってもらう活動を行っている。サイトでは、えだまめに関する情報提供をメインとしているが、より多くの人々へ拡散するために、すでに地域資源として確立されているモノや認知されている人、イベントとのコラボ企画を展開している。例えば市内の会社に勤める「秋田美人」に本プロジェクトのポスターを持ってもらい写真を撮影してサイト上で公開したり、同様に、地域のイベン



「倶楽部スイーツ」の商品開発会議の様子



えだまめを利用して開発したスイーツ



スイーツコンテストの参加者ら

そこで市内各地の連携を深めるため今年7月、えだまめに関する事業を行って、いる企業や団体、地区を対象に「えだまめのまち大館連絡協議会」を設立する。今後はこうした協議会を中心に、関係者が一体となり、「えだまめのまち大館」に向け、さらに活動を強化していく考えだ。

成功している先進地を視察することにし、昨年9月から10月にかけて北海道の美瑛町や中札内村を訪問。商品開発や販路開拓に関するノウハウや地域資源の活かし方などを学んだ。さらに将来の大館産えだまめの全国展開を見据えて、神戸や大阪で市場調査を実施し、情報を収集した。こうした中で、市内7菓子店の職人が、新たな大館銘菓を開発することを目的に、競合店同士でありながら、互いの菓子づくりに関する知識や技術の情報交換を行う団体「倶楽部スイーツ」を立ち上げた。現在は

「大館市えだまめ産地育成研究会」と連携し、新たなえだまめスイーツの商品開発に力を入れている。平成27年6月までに10品以上のえだまめスイーツを開発し、大館を代表するスイーツにしようと試作を重ねている。

### (3) 地域とえだまめの関係づくり スイーツコンテストを開催

大館産のえだまめをより身近なものにするために、平成26年9月には「大館市えだまめ産地育成研究会」が主催し、大館えだまめスイーツコ

ンテストを開催した。一般の方や高校生など市内外から32品の応募があり、選考を通過した10品で最終審査を行った結果、軟らかいプリンにレモンジュレを加えた味が特徴の「枝豆のさっぱりパンナコッタ」が最優秀賞に輝いた。その後、市内の飲食店でこの作品にアレンジを加えて商品化し、地域のイベントなどで限定販売を行っている。

このほか、市内の高校生が考案した企画を地域イベントで実施。ステージイベントやレシピ提案など、さまざまな形でえだまめをPRする

活動を行っている。

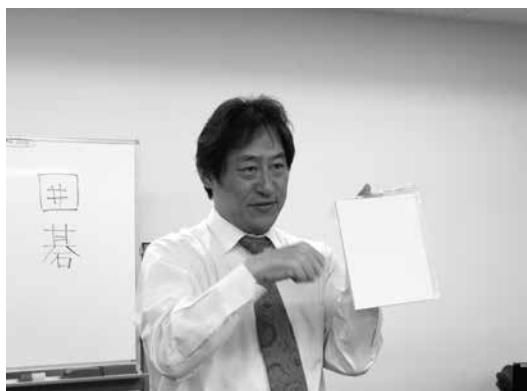
### えだまめを核に街おこし

このように農工商が連携して「えだまめのまち大館」を目指し、多彩なプロジェクトを展開しているが、最近では市内の各地区がそれぞれ独自にえだまめを活用した街おこしに乗り出すケースも目立つ。例えば山館地区では地区内で収穫されたえだまめにオリジナル品種名をつけて、えだまめをメインとした料理や菓子をつくり、これを活用したイベントを開催するなど地区全体を巻き込んだ活動を展開している。

# 「いっしょ豊かに生きる地域を目指す」をテーマに ～今年度第1回土日集中セミナーを開催～

地域活性化センターでは、平日に参加が難しい自治体関係者などを対象に、テーマに対して複数の視点から講師の先生をお招きし、学びを深め、実践へと移すため、「土日集中セミナー」を開催しています。

平成27年度第1回は4月25、26の両日、「いっしょ豊かに生きる地域を目指す」をテーマに開催。講師には囲碁九段の安田泰敏氏、東京おもちゃ美術館の多田千尋館長と石井今日子氏、NPO法人翔和学園理事・



講師の安田泰敏氏

学園長の伊藤寛晃氏を迎え、コミュニケーションツールとして注目されている「ふれあい囲碁」と「木育」について理解を深めました。

## ふれあうきっかけが大切

「ふれあい囲碁」は安田泰敏氏が中学生のいじめ自殺の報道を見て始めたものです。いじめられ、自殺した子どもの遺書には、両親に相談できなかったことへの謝罪の文面がつけられていたそうです。最も身近な存在である両親にすら相談できない環境を嘆き、誰かに相談できるきっかけの重要性に気付き、「人と人をつなぐ接着剤」として「ふれあい囲碁」に行きついたそうです。

今回のセミナーではまず受講者が実際に「ふれあい囲碁」を試すところからスタート。講師の方々も交えて楽しみながら緊張もほぐれていきました。対戦前には自己紹介のほか、お互いの夢を語り合う時間を設けました。改めて自身の夢に向き合い、それを言葉にすることで、よりこ

ろを通わせることを実感する機会となりました。

「ふれあい囲碁」は、親子がふれあう時間を増やすことで虐待防止へつなげたり、高齢者を訪問する際のコミュニケーションに役立てたり、神奈川県川崎市高津区では、公立保育園への導入をきっかけに、私立を含め幅広いふれあいへ広がったりするなど多くの効果が見られています。しかし、どこでも誰とでも接することができることが重要であり、「囲碁でなくてもよい。向き合い、ふれあうきっかけが大切」との安田氏の言葉が印象的でした。

## 学校での実践例を紹介

また、「ふれあい囲碁」を実際に活用しているNPO法人翔和学園学園長の伊藤氏からもお話をいただきました。

同学園では発達障害を抱えた人々の学びを支援しています。発達障害を抱える人は集団で行動していても心では孤独を感じていることが多い

のですが、同学園では周囲の環境だけでなく、本人自身が変わることも大切ではないかという考えのもと、他人から受け入れられる経験、大切にされる経験を得ることで仲間と共同して行動できるようにすることを目指しています。

翔和学園では、そのコミュニケーション手段として「ふれあい囲碁」を導入し、相手のことを考えられるようになることや、勝敗だけにこだわらず新たな価値観に気づくことなどに効果を見出しています。

## 豊かなつながり生む「木育」

東京おもちゃ美術館館長の多田千尋氏からは「木育」の取り組みと理念についてお話をいただきました。

「木育」は子育て支援の一面があるだけでなく、暮らしの中に木を積極的に取り入れようという活動であり、さらに国産材の活用を推進し、国内林業の復活をめざす試みでもあります。

多田氏は木育の取り組みの一つと



ふれあい囲碁を楽しむ参加者ら



パネルディスカッション。笑顔で講師の話を聞く参加者ら

して、建物の木質化による効果に触れ、例えば東京おもちゃ美術館にある「赤ちゃん木育ひろば」では「赤ちゃんが泣かない」「母親が携帯をいじらない」「父親の滞在時間が長い」などの効果が見られると指摘しました。

「木」を通じて、「こころ」を通じる。「木育」の活動は、地域内はもちろん、より小さな単位である家庭から人との豊かなつながりを生み出す可能性を秘めていると感じました。

また、同じく東京おもちゃ美術館の石井今日子氏は、同美術館が進める「赤ちゃん木育サポーター」につ

いて説明。子育ての現場には自然に多様な人が子どもとふれあえる風景が必要ではないかとの思いから、「赤ちゃん木育サポーター」として関わってくれる多種多様なボランティアの方々による多世代交流の促進を目指している」と強調しました。

親子間であつても、虐待一步手前のグレーゾーンにある人々を救うのは地域の力であり、「赤ちゃん木育サポーター」との交流がその一助になることができればという石井氏のお話に、会場内では深く頷く参加者の姿が見られました。

## パネルディスカッション 講師と参加者が意見交換

2日目は講師の先生方のお話を踏まえてパネルディスカッションを実施しました。会場からも種々のテーマで話題提供があり、講師と参加者が意見を出し合い、深め合う有意義な時間となりました。

「生きづらさを感じる人々の孤独感に向き合う」「地域の人々とともに歩んでいくためには」「虐待を防止するために我々ができること」という三つのテーマで議論が進み、「真に相手の立場に立つて考え、行動すること」こそが重要な

ではないかという一つの結論に達しました。

我々を取り巻く種々の状況の中には、専門家にしか対応できないことも多くあります。しかし、身近な部分に目を向ければ、地域の力でこそ対応できるものもあるのではないのでしょうか。垣根を外し、地域内の人と人がつながりあうことが重要です。その手法の一つとして、「ふれあい囲碁」

や「木育」を活用してほしいという講師の想いが

参加者にも浸透したのではないかと  
思われます。

今回取り上げた二つのキーワードにはどういった共通項があるのか、参加するまでは理解できなかった受講者も多かったと思います。しかし、このディスカッションを通して、「土日集中セミナー」の目的である、複数の視点により新たな開発を生むことを体感していただけたのではないかと考えています。

このように、1人の方からの成功体験の伝達にとどまらない、より実践的な開発の場をめざし、地域活性化センターでは今後も「土日集中セミナー」を開催します。

7月11日(土)、12日(日)には高校が地域にあることの意味、地域と高校が互いに好影響を与えあう関係性について考えます。8月1日(土)、2日(日)には滋賀県東近江市におけるソーシャルキャピタルをベースにした地域内循環による地方創生について、6人の実践者の経験をもとに話を深めていきます。

多様な立場の人が多様なテーマについて議論し合う、新たな気づきの場に足を運んでみませんか？貴重な考え、想いを持った皆様のお申し込みを心よりお待ちしております。

クリエイティブ事業室

● 神坂 文康

# 教育体験旅行を重点に、交流を推進

## 「京都丹波の豊かな「食と森」を活かす」



京都丹波・食と森の交流協議会 会長 ● 山田 進

都市から地方への移住・交流は、人口減少社会における地域活性化策の柱として期待される。地域活性化センターでは、「移住・交流による地域活性化支援事業」として、地域団体もしくは市町村等が自主的・主体的に実施する、都市住民などを受け入れる事業を支援している。今回は平成26年度に同事業を活用した京都府南丹市の取り組みを「京都丹波・食と森の交流協議会」会長の山田進氏にご紹介いただいた。

(企画・コンサルタント業務課)

### 食材の宝庫・京都丹波

「京都丹波」地域は、京都市の北西部に隣接した、亀岡市・南丹市・船井郡京丹波町の2市1町の地域で、京都府の中央部に位置します。この地域は、京都府の分水嶺をまたぎ、府の2大河川である「由良川」の源流域であるとともに「桂川」の中流域に広がる盆地もあり、自然が豊かで歴史のあるところです。平安時代以降、京の都に近いこと

から、朝廷・貴族・寺社などの荘園が多く存在し、丹波松茸・丹波栗・丹波瓜・丹波小豆などの特産品も山陰道や篠山道を経て都に供給されました。京の都の人々の食生活を支えるとともに、京料理や京菓子の伝統形成に多大な役割を果たした地域です。現在は、米や京野菜、畜産物を中心として、京都府内有数の食料供給地となっており、京野菜の出荷額は、京都府全体の約4割を占めています。

ます。

### 「食と森の交流の都」構想を策定

今後の京都丹波地域振興の羅針盤となる計画を策定する検討委員会が、平成22年に京都府南丹広域振興局が事務局となり設置されました。この検討委員会の意見をもとに平成23年3月、「京都丹波『食と森の交流の都』構想」が策定されました。

同構想は①京都丹波が一体となった継続的な交流のための「組織・人づくり」、②京都丹波ならではの質の高い「交流商品づくり」、③快適で魅力あふれる交流のための「交流環境の整備」、④京都丹波の認知度向上のための「戦略的な情報発信」の4つを柱としています。

そして、行政が主体ではなく、都市農村交流を進め、継続できる仕組み

みづくりを定着させるために、平成23年5月に「京都丹波・食と森の交流ネットワーク」(86会員で構成)を設立するとともに、平成24年4月には「京都丹波・食と森の交流協議会」(以下、食森協議会)を設立して活動をすすめています。

### 教育体験旅行に重点 地域の魅力活かす

京都府有数の食料基地でありながら、京都丹波地域の中心地となる「園部駅」(南丹市園部町)にはJR利用で「京都駅」から約35分、名神高速道路「大山崎ジャンクション」から京都縦貫自動車道で「園部インター」までは約30分の距離です。この園部町の中心地から、さらに由良川源流域(南丹市美山町知井地区)



作成したプログラム集など



へは車で約1時間で行くことができ、近年、飛躍的にアクセスが向上しました。

この間、特に力を入れて取り組んできたのが、この地域の魅力を活かした「教育体験旅行」です。この地域全体で、平成26年度には東京都や広島県などから28団体、1996人の教育体験旅行を受け入れています。

食森協議会でも、地域活性化センターの「移住・交流による地域活性化支援事業」による助成も受けながら、農家宿泊体験モニターツアー（中学2年生32名）や日帰り教育体験（小学5年生52名）の受け入れをはじめ、平成26年度で合計628名を受け入れています。事業で行ったモニター



ツアーは、いずれも27年度以降継続した取り組みとなっています。

また、教育体験旅行に特化したホームページの作成も予定しており、積極的に教育体験旅行の誘致やPRを展開しています。

さらに、農林水産省の「都市農村共生・対流総合対策交付金」なども活用させていただき、46の体験プログラムを一挙に掲載した「教育体験プログラム集」や紹介DVD、受け入れ農家拡大のための説明資料集やマニュアルなどを作成するとともに「民泊セミナー」農村民泊が地域を変える！」や民泊説明会、衛生講習会を開催しています。平成26年度末現在、京都丹波地域には農家民宿が



12軒、農村民泊受け入れ農家が約50軒と広がってきましたが、当面、年間3000名の受け入れを目標としています。

ワンストップ窓口めざす  
多様な活動展開へ

食森協議会では、会員の拡大とともにコーディネート力を強化し、教育体験旅行を中心としつつ、グリーンツーリズムやクラインガルテンの企画、地域イベントへの積極的な参加などを進め、「京都丹波地域での食と森の交流は全てお任せ下さい」という組織に発展していきたいと考えています。

農村民泊受け入れ農家からは、「最

初は不安がいっぱいだったが、受け入れてよかった」、「自分も集落もみんなが元気になり、楽しませてもらえる取り組み」という声をいただき、体験旅行をした学校の先生からは「普段、見ることのない（生徒の）姿・目の輝きを感じた」、生徒からは「いつもなら食べない食材も食べることができた。嫌いな食材が美味しく感じる。農業ももちろん初めての経験。とにかく全てが楽しい」といった感想が寄せられています。

協議会としては食と森の魅力があ

ふれる京都丹波での体験が、定住に結びつくことになったらとの期待をもっています。そして、この京都丹

波の地域の方々が、より一層自信を持てる地域（＝みやこ）と実感される事を大切に、交流の基盤整備（新たな体験プログラムの作成）や受け入れ農家等の拡大を進めていきます。

今後、食森協議会が移住・交流に向けたワンストップ窓口になれるよう行政とも連携しながら事業を展開していく考えです。

ぜひ一度、皆様もこの京都丹波の地域へ足をお運び下さい。

# フリーペーパー発行し、地域情報を発信

## ～住民のまちづくりへの気概も育む～

宮城県仙台市は、東側は太平洋に面し、宮城県中央部を横断する総面積785・85平方キロに及ぶ広大な市内には、船形山や広瀬川、名取川など多彩な自然景観が広がり、「杜の都・仙台」として親しまれている。

今回は同市青葉区でフリーペーパーの発行や、情報とまちづくりをセットにしたユニークな中間支援機能を構築している「お！宮町地域情報編集局（以下、「編集局」という）」

の活動について、編集長の千葉富士男氏にお話を伺った。

**編集局を立ち上げフリーペーパーで情報発信**

編集局が活動対象地域としている青葉区東六地区は、仙台駅の北側に位置する地区である。町内会活動は盛んだったが、昔から住んでいる高齢者が多い一方で、町内会に加入していない外国人居住者やマンション住まいの住民も多く、一時期、近所付き合いが薄れつつあったという。

東六地区連合町内会では、平成16年から17年にかけて地域活性化委員会、まちづくりの戦略を検討し、最もニーズの高かった「地域情報の共有」の事業化に乗り出すことになった。

具体的には回覧板だけでは情報共有が難しいことから、地域と住民を結ぶ話題を継続的に発信するフリー

ペーパーを創刊することにし、仙台市の助成金を活用してフリーペーパーの作り方の研修会「取材・編集力向上講座」を約半年間にわたって実施。その卒業生を核にして、平成22年、住民参加型の編集局を立ち上げた。

編集局は、20代から80代まで市民ボランティア26人で構成されており、新聞社と同様に、主筆や編集長を置くとともに、編集会議の準備や取材先などとの連絡調整を担当する事務局長も配している。

**ボランティアが手づくり地域のお店や学校行事も掲載**

フリーペーパーは仙台市青葉区東六地区内の「宮町」という地名にちなみ「038 PRESS（おみやプレス）」というタイトルで、年4回、毎回8000部発行されている。A4判8ページのカラー仕様。平成27年4

月で創刊準備号も含め通算17号に達した。



編集長の千葉富士男氏

取材・撮影・編集・デザインまですべてボランティアがこなし、編集会議や取材、配布活動等で、1号あたり8回程度集まっている。仙台市立東六番丁小学校区内の全戸に配布するほか、地区内外の銀行や郵便局、公共施設にも置いている。また、町内会に加入していないマンションの住民にも読んでもらえるように、スタッフ自らボスティングも行っている。

編集局立ち上げから平成25年度までの3年間は市の助成金を活用していたが、現在は地域内外の企業からの広告収入（平成26年度は8社）や町内会からの助成金を財源とし、財政的にも自立している。

「038 PRESS」は毎号、特集を組んでいるほか、地域のお店、文化財や伝説の紹介、小中学校の行事予定などを掲載している。毎回紹介されるお店を楽しみにしている読者も多く、和菓子屋さんや読者向けのクー

### ★団体プロフィール★

設立年＝2010年11月

設立・運営主体＝自主的組織

代表者＝編集長 千葉 富士男

構成員＝26名

〈連絡先〉

〒980-0012

仙台市青葉区錦町二丁目4番48号

電話：090-7932-5021



宮町を  
創業のメッカに



「O38 PRESS」の表紙



編集会議の様子



小学校で取材・編集方法について授業

ポン付きで掲載され、それまであまり利用のなかった小学生の利用が増えたお店もあったという。

## 小学校との連携、災害時に威力 商店街振興にも取り組む

東六番丁小学校の児童が授業で編集局取材したことがきっかけになって、児童自らの発案で小学校でも独自のフリーペーパー作成の話がスタートした。小学校5、6年生の総合的学習の時間に、編集局スタッフが学校に出向き、取材・編集の「イロハ」を伝えながら授業を支援し、「106プレス（とうろくプレス、とうろくは東六番丁小学校の略称）」が発行された。

「106プレス」は児童が独自に民話や地元の商店で扱う商品、文化

財などについて取材し、ワープロで原稿を作成した。取材を通じて、児童は地域の人から、「自分たちは東六地区をこうしたい」という思いを学ぶことができたという。編集長の千葉氏は「子供たちが自発的にこうした活動に取り組んでくれたことは編集者冥利につきます」と話す。

東日本大震災時には、この小学校が避難所となったが、日頃培っていたコミュニティ活動の成果により、地域で受け入れに協力して小学校をサポートし、避難所運営が円滑に行われ、総務省や仙台市等、各方面から表彰された。こうした災害時の行動も、日頃のまちづくりの延長線上であり、小学校と連携していたからこそ、うまく救助活動ができたという。

また、地元の宮町商店街とも連携

しており、「宮町なるほどツアー」として、地域の店を回るミニツアーを年4回開催し、そのツアーの様子を紙上で紹介しながら住民参加型の紙面づくりに取り組むなど、地域を結ぶ、横糸的役割を果たしている。さらに、商店街の店舗の新たな担い手（創業者）を発掘し、彼らの事業のスタートアップを支援するなど、商店街の振興にも取り組んでいる。

このように編集局の活動は多岐にわたっているが、その目的は、単にフリーペーパーを発行することではなく、それを手段として、様々な活動を地域に仕掛け、地域をより活性化することにある。重要なことは、「取材の中で地域の課題を知り、それを解決するための議論を巻き起こすとともに、多様な住民の地域参画

を促し、彼らを支援していくこと」（千葉氏）だという。

## まちづくりへの気概を育てる

編集局は、設立当初は東六地区連合町内会のまちづくり事業の一環として、中間支援組織を目指してスタートした事業だったが、平成26年度から市の補助金の期限が切れたのを機に連合町内会から正式に独立することになった。このため今後は企業協賛を含め様々な事業資金を独自に調達するとともに、地域課題解決型の法人化も視野に、市民活動をさらに盛り上げるような中間支援「組織」を目指したいという。

千葉氏は「（編集局は）単に情報誌を作りたいために活動しているのではない。この先10年後、20年後に向けて、自分たちの町を自分たちで何とかしたいという（地域の人々の）気概を育てたい」と熱く語る。

編集局のように、地域をつなぐ「横糸的役割」を果たす組織の意義はますます大きくなっている。中間支援組織としての活動がさらに発展し、まちづくりに熱心な住民が増えることを期待したい。

編集委員 ● 小口 静香

## 書籍紹介

### 「地元」の文化力 地域の未来のつくりかた



河谷剛彦 編著  
吉川徹 熊倉純子 玄田有史 神門善久  
小島多恵子 狭間諒多朗 渡辺靖 著  
河出書房新社（2014年9月30日発行）  
定価：1600円＋税

UターンやIターンといった「人の移動」。人口減少時代を迎えた地域にとって「人の移動」というのは大きな関心事の一つと言えるだろう。

本書では、「人の移動と地域の文化活動がどのように関係しているのか」「Uターン者やIターン者が地域の文化活動の中で果たしている役割とは何か」が、分野の異なる専門家（社会学、経済学、文化人類学、農業経済学、文化環境論）によって論じられている。長きにわたって地域の人々を魅了している5つの文化活動（岩手県遠野市「遠野物語ファンタジー」、長野県飯田市「いいだ人形劇フェスタ」、北海道壮瞥町「昭和新山国際雪合戦」、沖縄県那覇市「琉球國祭り太鼓」、茨城県取手市「取手アートプロジェクト」）についての考察が、多様な視点から縦横無尽に行われ、地域でいきいきと活躍する移住者の姿が色鮮やかに映し出されている。

また、本書では「Sターン（Short Turn もしくは Small Turn）＝近隣からの移住者」という興味深い視点についても紹介されており、地域の文化活動の中で「ほどほどに隣人・ほどほどに他人」であるSターン者が果たしている重要な役割についても論じられている。地域の未来を考えるうえでヒントとなる視点が各所にちりばめられた1冊である。

## コンテンツツーリズム入門



増淵敏之 溝尾良隆 安田亘宏 中村忠司  
橋本英重 岩崎達也 吉口克利 浅田ますみ 著  
古今書院（2014年11月30日発行）  
定価：2300円＋税

本書の著者は、コンテンツツーリズムを地域活性化や地域文化創出などの視点で研究するコンテンツツーリズム学会の理事及び会員である。

国のクールジャパンの推進をはじめ、近年の日本のコンテンツへの注目は一層高まっている。作品の聖地巡礼客をターゲットとしたコンテンツツーリズムに力を入れる地域も増えてきた。

本書は、コンテンツツーリズムの入門書として、「アニメ」「ドラマ」「ゲーム」「音楽」等のジャンルごとに、具体的な事例を取り上げ、歴史や効果を初心者にもわかりやすく紹介している。また、今後のコンテンツツーリズムのあり方に考察を加えており、地方で持続させていくためには、地域の特色や文化と組み合わせることが必要であり、聖地巡礼のみに終わらせないことが地方の活性化にもつながると著者は述べている。

アニメからB級グルメまで、幅広い文化がコンテンツとして活用される時代となり、まだまだ可能性の広がっているコンテンツツーリズム業界。興味がある方は本書からぜひ研究を始めてみてはいかがだろうか。



秩父市長 ● 久喜邦康

## 市民とともに実践

～明るく豊かに暮らせる活力あるまちづくり～

秩父市は、埼玉県の北西部、都心から60～80キロメートルに位置し、美しい秩父連山に抱かれた多様な地質・地形、そして歴史・文化の宝庫の街です。鉄道を使えば東京・池袋から、わずか約80分で、緑豊かな悠久の大地「秩父」へ気軽に訪れることができます。

私は、「市民との協働により日本一しあわせなまち」を目指して、様々な取り組みを行っています。特に力を入れ、人口減に対応して実践している、「持続可能なまちづくり」についていくつか紹介いたします。

まず、水道事業の広域化の推進です。人口減少に伴う給水収益の減少や水道施設の老朽化など、当市の水道事業は大変厳しい状況です。そこで、「ちちぶ定住自立圏」を形成する秩父地域の1市4町で、圏域4水道事業の統合を積極的に進めています。これにより、今後の水道施設の更新費用の大幅な削減を達成し、将来的には県内水道の一本化を目指したいと考えております。

次に、産科医療の確保、民間医療機関の連携強化、地域包括ケアシステムの実践です。秩父地域は産婦人科診療所が一軒のみとなってしまうので、私が直接、大病院等関係機関に足を運び医師確保に努めたところ、かつて多かった里帰り出産なども徐々に増えてきました。引き続き「地域内完結型医療の実現」を目指すとともに、

医療・介護・予防・生活支援・住まいなどが一体的に提供される「ちちぶ版地域包括ケアシステム」を構築してまいりたいと思います。

次に、おもてなし観光の推進です。さらなる増加が見込まれる外国人観光客に対し、英会話講習事業の充実やガイドの養成などを積極的に行い、秩父の特長であるジオパークなど教育観光を充実させ、秩父圏域全体への観光客倍増を目指してまいります。

秩父は多彩な民俗・芸能にも恵まれた地域です。子どもたちへの教育活動の一環で、技術の伝承をはじめ、伝統文化の継承も行っておりますが、引き続き郷土を愛する子どもたちがたくさん育つよう、「住んでよし、訪れてよし」のまちづくりを心掛けています。

さらに、WHO推奨のセーフコミュニティの推進、新教育委員会制度の下での基礎学力向上のための大改革、企業誘致と地元企業への応援、森林資源を活用したバイオエネルギー循環システムによる林業再興と雇用創出などが挙げられます。

私の政策を推進していくために、市民の皆さんとともに力を結集し、一致協力して事にあたる「協心戮力（きょうしんりくりよく）」を常に肝に銘じ、日本一しあわせなまちをつくりあげたいと決意しております。



三重の田舎暮らし応援します！

ええとこやんか 三重



海があり、山があり、人がいる

三重県

**竹**原市は、広島県の瀬戸内海沿岸のほぼ中央に位置し、豊かな自然と温暖な気候に恵まれています。

平安時代に京都下賀茂神社の荘園として栄え、江戸時代に製塩や酒造業で発展した旧家が軒を連ねる町並みは、国の「重要伝統的建造物群保存地区」に選定されています。

竹原市出身で日本ウイスキーの誕生を支えた竹鶴政孝氏は、連続テレビ小説のモデルにもなりました。また、竹原を舞台とするアニメ「たまゆら」が、今年全4部作にわたり全国の劇場で上映され、全国各地からファンが訪れています。

さらに、毒ガス製造の過去をもつ大久野島が、近年「うさぎの島」として人気を集めています。島全体がまるごと休暇村になっており、四季折々の自然の中で、サイクリングや温泉、キャンプなどを楽しむことができます。

そんな竹原市の名産品は、地酒、塩、ぶどう、ご当地グルメのいもタコカレーなど様々です。

多くの先達が築いてこられた歴史文化、コミュニティなどの地域資源があふれるまち竹原。その魅力を、肌で感じてみませんか。



■町並み保存地区 江戸時代に製塩や酒造業で栄えたお屋敷や由緒あるお寺と町並みが今もそのまま保存されている



■たまゆら 女子高校生の日常を描いたアニメ。竹原の風景が忠実に描かれている

© 2015 佐藤順一・TYA / たまゆら〜卒業写真〜製作委員会



■黒滝山からの風景（竹原市忠海町） 眼下には大久野島、芸予諸島、世界最長の斜張橋・多々羅大橋、遠く四国連山を一望できる



■大久野島 四季折々の自然にあふれるリゾート地



■新・ご当地グルメ第2弾 「竹原いもタコカレー」 素揚げしたじゃがいもとタコの味付け唐揚げがのった竹原ならではの当地カレー



■たけはら憧憬の路 風情ある町並みを竹筒からあふれるろうそくの灯りで幻想的にライトアップする。今年は10月31日、11月1日に開催される



■西方寺普明閣 市重要文化財の竹原市の景観の中心となる重要な建築



■地酒 中尾醸造、竹鶴酒造、藤井酒造の3蔵があり、それぞれの個性が光る。純米酒に力を入れている

## 地方創生実践塾のお知らせ 【第2回】東京都荒川区【第3回】北海道帯広市

### ◆第2回「荒川区民“総幸福度 (GAH)”の取り組み ～『指標化』と『地域力』～」【東京都荒川区】

荒川区は、主観的な「幸福」という感情を数値化する指標として「荒川区民総幸福度 (GAH)」を作成。この指標を使い、荒川区に関わる人々の幸福実感をより一層高めようという取り組みを全国に先駆けて行っています。

荒川区民総幸福度 (GAH) の理念と技術的側面についての学習や、区民が行う取り組みを体験することで、地域の幸福度、幸福実感について考えます。

- 【講師】 広井良典氏（千葉大学法政経済学部 教授）ほか  
 【開催日程】 平成 27 年 7 月 23 日（木）13:00 ～ 24 日（金）16:30  
 【会場】 荒川区役所 北庁舎 101 会議室  
 （東京都荒川区荒川 2- 2- 3）  
 【定員】 40 名（先着順、定員に達し次第締め切ります）



千葉大学法政経済学部 教授  
広井 良典 氏

もうすぐ開催！  
皆様からのお申込み、お待ちしております！

### ◆第3回「食と農林漁業からのイノベーション ～フードバレーとかちで取り組む持続可能なまちづくり～」 【北海道帯広市】

アメリカのシリコンバレーがコンピュータ産業の集積地ならば「フードバレー」は優れた「食」が集まるところ。北海道の十勝地方では、食と農林漁業を柱に、持続可能で活力ある地域を目指す「フードバレーとかち」の取り組みが進められています。多様な主体と連携しながらこの取り組みを推進する北海道帯広市で地域のブランド化、協働、持続可能なまちづくりについて考えます。

- 【講師】 北村 貴氏（株式会社グロッシー 代表取締役）ほか  
 【開催日程】 平成 27 年 8 月 26 日（水）13:00 ～ 28 日（金）12:00  
 【会場】 とかちプラザ  
 （北海道帯広市西 4 条南 13 丁目 1 番地）  
 【定員】 40 名（先着順、定員に達し次第締め切ります）



株式会社グロッシー代表取締役  
北村 貴氏

※ 申込方法等、詳しくは地域活性化センター  
ホームページをご覧ください。

◆ お問い合わせ先：地域支援課（電話 03-5202-6136）

地方創生実践塾ページ

▼ QR コード ▼



## 平成27年度 地方成功人材のマッチングによる土日集中セミナーのお知らせ

### 第4回「魅力化による高校の生き残り」と地域活性化」

消滅自治体論議とそのあとに巻き起こる地方創生戦略策定の中で、人口減少社会では地域の活力維持が大きな論点となっています。また、人口減少による定員割れにより多くの高校が統廃合の危機に直面しています。

しかしながら、地域の活力を維持するという観点から高校存続は必須の課題であり、高校の魅力化による入学増を目指す試みが全国各地で行われています。

今回は地方創生戦略策定の中で、地域の高校はどうあるべきか、地域と教育はどう連携して魅力化を図り地域の活力を維持するのか、現場の担当者からそれぞれの取り組みを聞き、如何なる地方創生戦略を編み出すかを考えます。

【講師】 齊藤俊幸氏（地域再生マネージャー）、藤岡慎二氏（島根県立隠岐島前高校教育ディレクター）ほか  
【開催日程】 7月11日（土）13:00～18:30、12日（日）9:00～13:00（予定）

### 第5回「地方創生のカギは自分たちの中にある！～未来を地域の中に見つけた東近江の挑戦！！～」

自分たちの中にある資源が関わり合うことで、新しい価値を生み出す。これこそ地方創生のあるべき姿です。

滋賀県東近江市では、近江商人の心得である「三方よし」の精神のもと、持続可能な地域づくりをすすめており、ヒト・モノ・カネが分野を超えて繋がりながら地域内で循環することにより、『食（foods）・エネルギー（energy）・ケア（care）の自給圏』の創造を目指しています。

地域のヒトが関わり合いながら創発し合い、福祉や環境といった多分野で新たな価値を生み出している東近江の仕組みを学び、地域の課題解決だけではない「逆転の発想による地域づくり」を考えます。

【講師】 チーム東近江（東近江市のみなさん）  
【開催日程】 8月1日（土）13:00～18:30、2日（日）9:00～13:00（予定）

▼各回共通

【会場】 地域活性化センター大会議室（東京都中央区日本橋2-3-4 日本橋プラザビル13階）

【対象者】 地域活性化に熱意のある方

【参加費】 一般 25,000円、大学生 10,000円  
※3回券（60,000円）、6回券（90,000円）あり

【申込方法】 FAX（03-5202-0755）またはE-mail（creative@jcrd.jp）

【問い合わせ先】 クリエイティブ事業室（TEL：03-5202-6134）  
※詳しくはホームページをご覧ください。http://www.jcrd.jp/

## 平成27年度 地域づくりコーディネーター研修会のご案内

自主的、主体的な地域づくりのための活動を行う民間団体の全国組織である地域づくり団体全国協議会より、「平成27年度地域づくりコーディネーター研修会」の案内がありましたので、ご紹介いたします。

参加ご希望の方は、下記の地域づくり団体全国協議会事務局へお問い合わせ下さい

平成27年度地域づくりコーディネーター研修会（北海道帯広市）概要

「『元気！アイデア！チャレンジ！』による輝く地域づくり」をテーマに、アイデアの源泉と地域変化のメカニズム、その結果と課題について経験豊富な実践家を交えて皆さんと一緒に学びます。みなさま、是非ご参加ください。

【日程】 平成27年8月4日（火）13時～8月5日（水）12時  
【場所】 とかちプラザ（北海道帯広市西4条南13丁目1）  
【内容】 実践家による事例発表、パネルディスカッション、交流会  
【対象】 地域活性化に熱意をお持ちの方  
【定員】 60名（但し、定員になり次第、締め切らせていただきます。）  
\*申し込み方法など詳しくは一般財団法人地域活性化センターのホームページ中、「地域づくり団体のひろば一研修交流事業」をご覧ください。  
【問い合わせ先】 地域づくり団体全国協議会事務局 03-5202-6135

昨年の研修会の様子



### 地域づくり7月号

2015年7月1日発行 編集・発行＝一般財団法人地域活性化センター  
東京都中央区日本橋2-3-4 日本橋プラザビル13階 電話03-5202-6131（代）http://www.jcrd.jp/ 印刷・製本／株式会社太平印刷社

法律で許可された場合以外に本誌からの無断転載を禁止します

落丁・乱丁はお取り替えます。地域づくり情報課（03-5202-6138）まで、ご連絡下さい。



# 宝くじは、 みなさまの 豊かな暮らしに 役立っています。

宝くじは、図書館や動物園、学校や公園の  
整備をはじめ、少子高齢化対策や災害に  
強い街づくりまで、さまざまな  
かたちで、みなさまの  
暮らしに役立っています。

一般財団法人 日本宝くじ協会は、宝くじに関する調査研究や  
公益法人等が行う社会に貢献する事業への助成を行っています。



一般財団法人

**日本宝くじ協会**

ホームページ

<http://jla-takarakuji.or.jp/>

